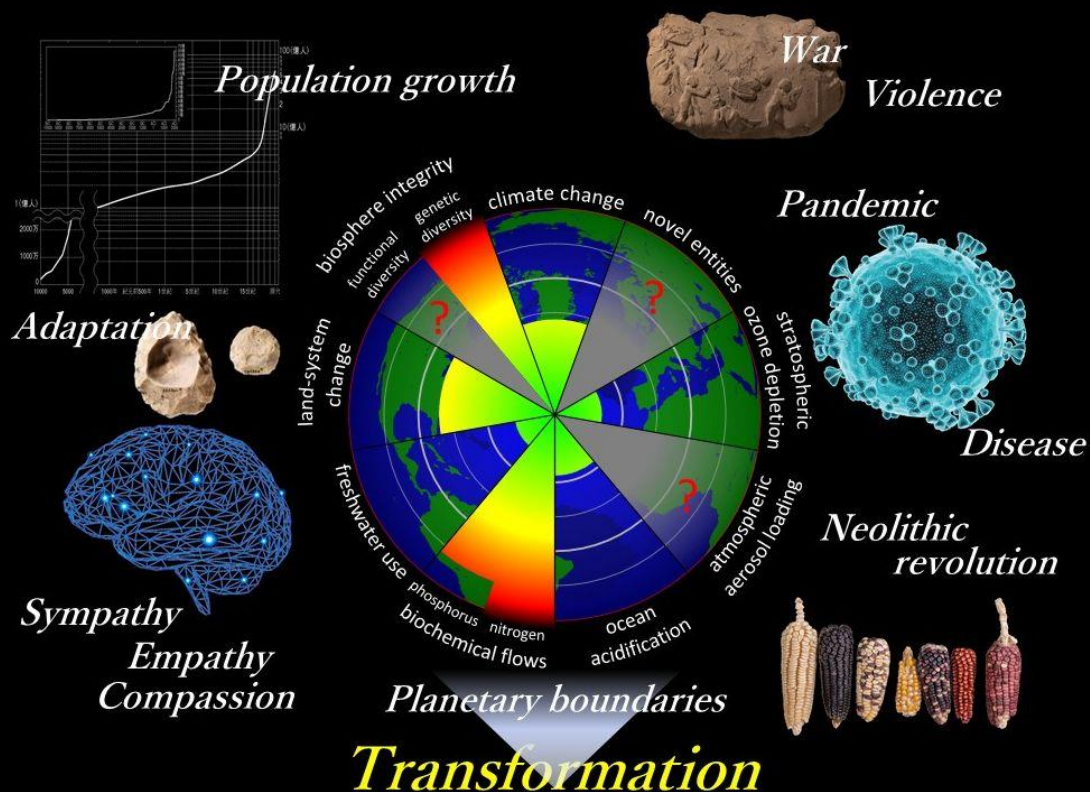


共感から共歓への昇華を目指して

レジリエンス人類史 総合討論



司会：稲村哲也（文化人類学 放送大学特任教授，愛知県立大学名誉教授）
阿部健一（環境学 総合地球環境学研究所教授）（以下 50 音順）
清水 展（文化人類学 関西大学特任教授，京都大学名誉教授）
関野吉晴（人類学・探検家・医師 武蔵野美術大学名誉教授）
中原聖乃（文化人類学 総合地球環境学研究所研究員）
馬場悠男（自然人類学 国立科学博物館名誉研究員）
山極壽一（霊長類学 総合地球環境学研究所所長，京都大学名誉教授）
山本太郎（感染症学・国際保健学 長崎大学教授）

編集・発行：総合地球環境学研究所

稲村：私たちはいま、『レジリエンス人類史』（2022年3月刊行、京都大学学術出版会）という本を刊行すべく編集を進めています。多くの人が指摘しているように、今、私たち人類は大きな危機に直面しています。その危機が、現代文明のなかから現れてきたものである以上、危機を乗り越えるためには、時間的にも空間的にも、その外側から見る視点が重要であると、本書の編者は考えました。そのためには、都市など近代社会ではなくて周縁的な社会からの視点、また、人類そのものの歴史すなわちサルからヒトが分岐した時代にまで遡り、その数百万年に起こった事実から考えるべきである。この本は、そうした視点に立って、人類史を俯瞰することでこれからの生き方や社会について考え、時代を転換するための「確かな知の土台作り」を目指しています。そのために、総勢実に26人、自然人類学、進化人類学、生態人類学、文化人類学、考古学、医学、遺伝学、脳科学、心理学、自然地理学、防災学、公衆衛生学、栄養学、リスクマネジメント、環境学、社会学、科学史、国際政治学、そして哲学と、人類と地球の過去と未来の運命を語る上で重要な学問分野の代表的研究者が一同に集まりました。

レジリエンスという言葉は、今後の社会を構想するうえで重要なキーワードであると思います。しかしこの言葉は、語る人や立場によってその意味する内容が全く異なるようにも見えます。それでは、レジリエンスという概念を役立てることができません。そこで、この概念を根本的に考えてみようということで、まず「危機や逆境を生きぬく知」とゆるく定義して、議論してきました。私たちは、この共同の議論から、「レジリエンス」の本質には、ヒトが進化の過程で獲得した「共感力」があるという共通の認識を得ました。しかし、「共感力」と一言と言っても、それが集団内や「仲間」同士で強力に働く一方で、その外側に対しては残虐性をもたらすこともしばしばです。つまり、「共感力」には両義性、多義性があり、それが真のレジリエンスとして発揮されるには、生き方や考え方の「転換」を行うことが重要であるということも分かってきました。

ではその「転換」の中身は何か、今後の社会のあり方を見据えながら、本の中では書けなかったこと、試論に近い事柄も含めた大胆な議論をしてみたいと思ったのが、この座談会です。メンバーには、本書の5つのPhase（部にあたるパート）の中から、主立った方々に集まっていただきました。よろしくお願いいたします。

■共感・移動・出会い

山極：最初は本に書いたことのおさらいになりますが、ヒトの進化史の上では、「共感」にはいくつかの段階があると考えられます。英語で empathy と呼ばれるものは、ニホンザルもその仲間であるマカクザルに見られることが1990年代に報告されました。仲間の他の個体がある行為をしていることを見ているサルの脳の中では、自分が同じ行為を実行するときに活動するニューロン（ミラーニューロン）が発火していることがわかったのです。つまり相手や仲間と同調しているということですが、しかしサルには、sympathy すなわち相手の置かれている状況を理解することができません。これは実際に観察されたことなのです。

が、深い水たまりを渡らなければならない状況で、母ザルが赤ん坊をお腹に付けたまま水に入る。つまり赤ん坊が泳げないことが母親には分からない。結果、赤ん坊が溺死してしまったのです。これが類人猿段階になると、たとえば子どもが落ちそうになっているとき、いち早く手を伸ばして助けるという行動が見られるようになる。つまり自分が持っている能力を子どもが持っていない、という認知能力が見られるのですね。

これがさらに人間になると、類人猿より二段階高い認知レベルにあると言われます。英語で compassion と言いますが、たとえば指さしをして共通の目標をみんなで見る事ができる。つまり相手の状況を理解するだけでなく、みんなで感じて共同で何かをする、助けあう、という力です。このように認知レベルが上がることで、私たちが普通言うところの「共感」が生まれたと考えられます。このように認知レベルが上がっていくと、自分以外の複数の個体が何を感じ合っているかということを理解できるようになる。私たちが、自分が参加していない劇や映画を見て感動できるのはこのレベルの認知能力を持てたからです。ゴリラやチンパンジーは、自分が参加していないと、共感能力を発揮することはできません。もともと身体の共鳴や同調から発して、身体の共鳴を越えて、目に見えない出来事や課題を共有できるようになる。これが人類の進化の中で段階的に作り上げられたと考えられるのです。



タンザニア北部エヤシ湖に近いラエトリ遺跡で見つかった、アフール猿人の足跡化石。2人の大人と、もう1人は大人の足跡を追って歩いた子供のものと推測され、かれらが、家族と、複数との家族からなる社会を作っていた可能性が大きい。この背景には「共感」という重要な認知能力の進化があった。(写真／アフロ)

馬場：僕の専門は化石を扱う人類の形態進化の研究で、心の進化というのは化石のような形で直接には残らないのですが、化石に残った事柄から、その状況（社会状況）を再構成し、そこから心の問題を類推することができます。その点で最も有名なのはアメリカの人類学者オーウェン・ラブジョイの「食物供給仮説」です。特定のオスが特定のメスに食物を供給する。その特定の結びつきに成功した者が多くの子孫を残すことができた。その際重要なのは、一つは直立二足歩行で、自由になった手で食物をうまく運搬できるようになったこと、もう一つは、オスとメスの身体差異が小さくなったこと、つまりオスが、チンパンジーのように犬歯や体の大きさではなく、食物を供給するという親しさでメスにアプローチしてメスを獲得したと考えられるということです。つまり、直立二足歩行をするようになったから

色々なことができるようになったというのではなく、子どもをたくさん残すことができる行動が直立二足歩行を促した。そして直立二足歩行ができるようになった個体の方が子孫を多く残せるので、そうした遺伝子を持った者が増えていったと考えたのです。この説は多くの支持を集めました。もう一つ有名なのは、関野さんが「グレートジャーニー」の旅の終着点とされたラエトリ遺跡で、アフール猿人の親子三人ではないかという大中小の足跡が並んで歩いている化石が見つかった。おそらくこれは家族、しかも近くでほかにも足跡列が見つかるので、複数の家族が群れを作って暮らしていたのだろう。ではそうした社会を繋ぐ心の特徴とはどういうものか、と推論していくわけです。

関野：いま馬場さんから優しいオスのイメージが出ましたが、私が長く関わっているヤノマミの社会でいうと、男は強い庇護者ですね。ヤノマミの集団間ではしばしば戦争が起こりますが、女にとって最も怖いのは誘拐されて他のシャボノ（集住村）に連れて行かれることです。そこには庇護者はいません。それが一番怖いものだから、自分の仲間、同じ村の男たちは乱暴であっても良いので強くなくてはならない。一方、子供はというと、これはどの先住民社会でも一緒ですが、大人には大人の子供には子供の世界があって、乳幼児の面倒を母親が見る以外は、ほとんど親が育児に関わることがないので、同じシャボノの中の年長の子供が幼い子供の面倒を見る。現代社会のような、幼い子供に何か教えるというようなことは全くありませんが、幼少の者は年長の者を見て真似て育っていきます。その間、女は大変なんですね。薪割りも水くみも全部女の仕事。ただそんな時、男たちが子供の面倒をみたりする。要するに男は庇護者ですね。

山極：気をつけねばならないのは、私たちが今生きている先住民社会を見て、そこにヒトの祖型があると思っただけではないということです。すでにサルや初期人類からすれば、相当に進化した先の存在で、本書の中でも論じられたように、複雑な社会の中に生きていますから。その点を頭に置いておく必要はあるのですが、霊長類の社会では、群れを作って暮らす種では、例外なくメスは単独生活を送りません。つまりメスがオスをリクルートして群れを作っている。その理由の一つは食物を効率良く探すこと、もう一つは捕食者から逃れること、そしてオスの暴力から逃れることです。オスの暴力から逃れるためには、特定のオスを母子単位に引き込む必要がある。そのためには少数のオスでは足りないの、関野さんのおっしゃるように、複数のオスたちが群れを守るために連携する必要がある。そうしたことが積み重なって、社会が形成されていったと考えられるでしょう。

中原：私の対象とする太平洋の島嶼社会は、よく知られるように母系社会です。男は力は強いですが、長も男なのですが、その背後に女の力がある。社会関係から次のリーダーはこの男だとされていても、それがどうしてもふさわしくない場合は、女の方に任命権があって別の者が選ばれたりする。生活レベルで言えば、他の環礁、500キロとか1000キロ先の島に



ハワイに移住したマーシャル諸島民が数年ぶりに帰国するというので、知人友人がマーシャルに住む親族への届け物を帰省者に託す。壁にはマーシャル出自であることを示すハンディクラフトがある。何千キロメートルを隔てた人々の相互扶助が長く保たれてきたのが島嶼世界の特徴であり、担い手は主に女性たちだ。(2018年3月、ハワイ州オアフ島にて)

婚出しても女は故地を忘れてはならないとされ、ある島で災害などがあれば、いったんは婚出した人々が、ときに新たな家族とともに駆けつける。しかも短い期間ではなく、数ヶ月、数年という単位で、植林をしたり家を建て替えたりして助ける。遠く離れた島を跨いで、困難を抱えた人々に対する共感があると言えるでしょう。ここで大事な点は決して婚出先との関係性が希薄だというわけではありません。故地の伝統的保存食を婚出先のコミュニティで根付かせた例もあります。

もう一つ興味深いことを言えば、近代化の中で、女性が自ら遠くへ移動することができるようになった。カヌーによる移動は大変危険なものなので、もともとは女性は単独での移動ができなかった。したがって男性の庇護が必要だった。ところが今は船や飛行機がありますから、女性だって自分で移動できるんだということで、これまでは男でなければならなかった集団の長に女性になる例も出てきました。

清水：今お話に出た移動というのは、社会が変わっていくときの大きな要因ですね。私が長くコミットしてきたフィリピンのアエタの人々は、狩猟採集と移動焼畑農耕を組み合わせで暮らしてきたアジア系ネグリートですが、このわずか50年ほどで、その社会は関野さんが紹介されたヤノマミと同様の伝統的なかたちから大きく変わりました。たまたまのめぐり合わせで、私はその変化をほぼリアルタイムに目撃してきました。1991年のピナトゥボ火山の大噴火を契機にした彼らの生活と社会の変動は本の中に詳しく書きましたが、それ以前にも急速に変わってきていました。今から50年くらい前には、いわゆる拡大家族集団を単位に1000人くらいの小さな婚姻圏の中で内婚をしていました。それが40年ほど前に学校教育が入ってくると、学校に通ったり寄宿舎に暮らしたりし始めることで、それまでの婚姻圏でない外側の人々と出会うようになって、時に結婚したり駆け落ちしたりということが頻繁に起きてきます。爺ちゃん婆ちゃんの世代ですと、駆け落ちはやノマミと同様に敵対的な緊張を引き起こしていたのですが、孫の世代になると、もちろん大騒ぎにはなるのだ

けれども、話し合いや婚資¹のやりとりで上手く収めるシステムが定着してくる。怒っている相手をなだめるためにブタを贈って解決するというようなことですね。学校で出会った若者の愛と無鉄砲が社会を変えてしまうわけです。まるで 1960 年代後半のアメリカのヒッピー文化あるいはカウンター・カルチャー（対抗文化）のようなものですが、アエタのような伝統社会の中でも状況に応じて社会を大きく変えていく力があるという事実を見てきました。

山極：人類史からレジリエンスを考えるとときにも、移動と出会いというのはとても重要です。人類は全てアフリカ起源ですが、最初は 180 万年くらい前にホモ・エレクトゥスがユーラシアに進出した。それ以後、人類のレジリエンスは新たな環境に進出することでした。ところが現生人類（ホモ・サピエンス）が 5～8 万年くらい前にアフリカを出ると、急速に地球上に広がって、大洋の真ん中の島々と南極を別とすれば、1 万年くらい前にはすべての大陸に広がって、新たな環境への進出の機会は無くなった。そこで重要になるのが、出会いなのです。他の様々な地域の人類との出会いによって、新たな気づきを得てきた。人が移動すること、特に中原さんがおっしゃったように女性が持続的に移籍をすることで、新たな家族、新たな連帯関係が生まれ、そこでイノベーションが起こるということが広がる。それにしても、新たな環境への移動がまず重要だった。

ただここで問題になるのは、そうして広がった人類がただ一種であるという不思議です。普通、進化の過程では、新たな環境に進出すると生物は長い時間をかけて身体形質を変化させて環境に適応する。ところがホモ・サピエンスの場合、20 万年前に誕生し、5 万年というわずかな時間であつという間に地球上に広がって、しかも種としてほとんど変わらなかった。ここで何が起こったのか、レジリエンスを本質的に考える鍵があると思います。

■模倣する力、アナロジーと言語

清水：アエタの人々が大災害に柔軟に対処して危機を生き延びることができた要因を私は食料獲得手段の「重層的並存」にあると説明したわけですが、それは脳の発達とともに、様々な技術や生業を組み合わせることができたからでしょうか。

山極：一つは、馬場さんがおっしゃったように、家族と複数の家族による共同体という非常に強い社会力があつたこと、もう一つは、多様な環境に適応する際に、人類は様々な構築物を作ることができたことでしょう。たとえば寒い場所に進出するには、縫い針が必要だった。動物の毛皮を縫い合わせて暖かい服を作る。その際、模倣が重要だったと思うのです。そして言語ですね。脳の発達を基礎に言語を持つことで、経験していない過去の事柄を知り、未だに出会っていない未来、課題を予測できるようになった。ネアンデルタール人も言葉を

¹ 結婚に際して、新郎側の家族・親族が新婦側の家族・親族に贈与する金品。

しゃべったと言われますが、おそらくその内容はサピエンスとは違っていたと思います。何かを指示することはできたでしょうが、アナロジーはなかった。つまり全く違うものを結びつけることはできなかった。そこに現生人類とネアンデルタール人の違いがあったと思います。

たとえば伝統社会にも見られると思いますが、動物を真似たり森のような小屋を作る。言葉というものは物事を区別するという本質的な機能がありますが、動物と人というように分けて別々にしたものを、もう一度一緒にして新しい何かを作り上げることができるようになった。高い言語能力に基づいたアナロジーが、新しい環境へ進出する力になったのではないのでしょうか。ここには、自分の仲間以外、動物やモノに対しても深く認識し、それを一段高い抽象レベルに引き上げることができる能力があったのではないのでしょうか。

馬場：まったくおっしゃるとおりで、実際人類の拡散を見ると、10万年くらい前に、いちどアフリカを出たサピエンスは、今のイスラエルの辺りで、同じような石器技術を持っていたネアンデルタール人に押し戻されます。ところがアフリカで新しい石器技術を獲得すると、今度はネアンデルタール人を駆逐してしまう。その後、数千年単位で石器技術を更新していきます。ネアンデルタール人とは言う、石器は持っていたけれどゆっくりしか変化していません。サピエンスと出会って以降も変化していません。言うまでもなく石器技術とは獲物を獲るためのものですから、サピエンスはまさに新しい技術を作り上げることで、ネアンデルタール人との食料争奪競争に勝つわけです。

ここで注意したいのは、サピエンスとネアンデルタール人が混血していたことが今日明らかになっています。けれども、実は、混血していたのは西アジアでだけなのです。それ以後は混血していない。これは何故だったのか。そこに僕は、「共感」が関わっていると思うのです。ネアンデルタール人を仲間とみるのか競争相手とみるのか。そこで我々が考えるのは、当初は、サピエンスの石器技術の方が多少優れていたという程度で、両者は強い競争的關係ではなかった。DNAに刻まれた歴史で分かるのは、強いサピエンスの男が無理矢理ネアンデルタール人の女を自分のものにするというわけではなく、均等に混じり合っている。ところがその後サピエンスが石器技術をどんどん進歩させる中で、明らかな優劣ができてくると、ネアンデルタール人にとってサピエンスは脅威ですから、逃げてしまう。それで混血が行われなくなったのではないか。しかも興味深いことに今のヨーロッパ人の祖先、いわゆるクロマニヨン人が西の方に進出するときにも、そこに住んでいたネアンデルタール人とは混血せず追い詰めて行って絶滅させた。これは人類同士の関係ですが、本の中でも書いたように、新大陸やオーストラリアに渡ったサピエンスは大虐殺と言って良いほどに、大型動物を次々に絶滅させています。同種であれ異種であれ、どこまで仲間と見なすのか、そこに鍵があると思います。

阿部：今のお話を伺っていると、言葉による表象能力が発達することで、ヒト以外のものが、一種の仲間として真似る対象から、他者として利用する対象になっていったような気がします。自分以外の何かに対する認識が、違った段階に入ったと言えるのか、いずれにしても、そこに我々がどこで間違っただのかということを考える鍵がありそうです。つまり、本の中で言ってきた共感能力というものは、あくまでも仲間内のことに限られていたのではないか、という疑いです。その「共感」の限界を我々は越えられるのかどうか。

山極：人類社会が作り上げてきた強い社会性の表れとしての共同体は、まさに仲間同士の共感に基づいていてそれは今でもずっと続いているわけけれども、その「仲間」の外にいるもの、他の動物や人類といったものを「客観視」して、資源さらには敵として、利用する対象として見るような形の認知の変容が起こったという気はしますね。

関野さんはよくご存じのように、今でも狩猟採集民というのは、自分が食べる獲物に対しても共鳴し一体化する。狩猟の対象とする動物ともしやべることができるという精神世界に生きている。ですから、少なくとも狩猟採集生活と仲間を越えた他者への共感とは、それ自体は矛盾しない。こうして非常に長い間、人類は狩猟採集生活を続けてきた。ある時期からそれが急速に矛盾していった、その果てに我々現代人がいる。

その契機として考え得るのが、農耕と牧畜です。ドメスティケーション（家畜化、作物化）によって、野生生物を自分たちが利用しやすいように変えた。そして、作物と家畜は自分の側に取り込み、野生はそれ以外、というように認識した。そこには、狩猟採集社会とのある種の断絶が見えると言って良いかもしれません。

稲村：ただ、農耕・牧畜社会の中にも、新大陸の先住民やアジアの先住民では、自然と一体になった世界認識は間違いなくあります。アルパカを飼っているアンデスの牧民は、家畜の真の持ち主を聖なる山とし、家畜を育んでくれるのが母なる大地だと信じ、供物をささげて感謝の儀礼を行っています。モンゴル北部の山岳タイガの森のなかでトナカイを飼って暮らすトゥバの社会にも、アイヌの熊送りのような世界観があって、自然と一体化した共感力を持っている。日本の伝統の中にも、食べるものへの感謝の念が強くあった。

清水：僕も農耕・牧畜によってガラッと変わったというよりは、それ以後も長い間、人類の中には多様な環境世界認識があったと思います。人類という全体としての大きな集団のなかの多様性だけではなくて、かつて今も一人ひとりの個人のなかにも多様な世界観が併存していると思います。私の親などは、神奈川県なので大山講に入っていて毎年の夏に大山登山をして阿夫利神社に参拝をしていました。山の神に祈り、感謝し、心身を浄め霊的エネルギーを得ようとするわけですね。また季節ごとに旬の山菜野草を採ってきて、それを食べて薬膳にするとか、自然のなかにある大いなる力を我が身に取り入れてエネルギーを得るという習慣と心性がありました。病を癒すという点でも、自分の症状を判断して病院に出か



中国雲南省からミャンマー，ラオスにかけての山地に暮らすアカ族（哈尼族）の村の入口にみられる「パトオー・ピー（精霊の門）」。鳥を模した造形物を飾る風習があり，一説には日本の「鳥居」の原型ともされるが²，森羅万象に価値を置くアニミズムの哲学的本質は，「仲間内」を越える共生を目指す鍵の一つである。
（Photo by Maliayosh, License: CC BY-SA 2.0.）

けて近代医療で治療をしてもらったり，漢方薬局に相談して薬をもらってきたり，鍼灸師に頼ったり，あるいは鎌倉の銭洗弁天や水掛地蔵にお参りしたりしてました。自分の身体が発する変調を読み取り，西洋近代医療や和漢の伝統医療や神信心に助けや救いを求めました。病からの治癒を願い求める手段が重層的に併存しているというわけですね。

その点では，東南アジアの先住民社会にはまだアニミズム信仰が息づいていて，それはとても大事なことだと思います。確かに共生は人のレジリエンスの重要な形ですしその基礎には共感があります。けれども，この共感というのは，仲間内だけにとどまって外側の集団にまで及ばない時には，逆に「敵」に対する強い攻撃性を生みだし，逆にそれがさらに「仲間」を結束させる。現代における偏狭なナショナリズムや移民排斥がそうですが，そうすると，その「共感」の働く範囲と境界は何が決めるのか，そのメカニズムは，かつての人類社会と現代社会に通底するものがあるのか。そう考えると，今，この地球を万物諸霊が共存共生している一体世界として見るアニミズムの可能性というか「哲学」を真剣に問い直す意義があると思いますね。

山極：「ライオンマン」として知られる，ドイツで発見された「最古の彫刻」と言われる後期旧石器時代の象牙彫刻がありますね。頭がライオンで体が人。これにはいろいろな解釈がありますが，人間が持っていない力を動物から得ることで新しい力を得ようとした。ここには言葉を背景にしたアナロジーが明瞭に見られます。言葉をもちアナロジーという能力が

² 鳥越憲三郎編（1983）『雲南からの道：日本人のルーツを探る』講談社，山岸哲・宮澤豊穂（2022）『日本書紀の鳥』京都大学学術出版会。

高まった。それによってこれまで経験したことのないものに対して、人間以外の動物や様々なものの力を借りて、勇気を出して、もともと進化させてきた社会力を発揮して立ち向かっていった。

動物は、他の個体のために自らの命を投げ出すことは決してしません。それは人間だけの特徴で、これこそ強固な社会力の最大の表れですが、それができたのは、サピエンスが言葉によって新たな環境に立ち向かい、言葉によって自分を集団の中に位置づけようとしたからだと思いますね。そこに共感が持つ境界を考えるヒントがありそうな気がします。

■「虚の認識」と文明

稻村：言葉を使ったアナロジーと表裏一体の事柄として、ユヴァル・ノア・ハラリが言う「虚の認識」、つまり目に見えないものに対して記号をつくり、その記号には実は対象物はないのだけれども、記号そのものが実在するかのように考えるようになったことがあります。これがそれまでの長い人類史と決定的に違う、「文明」の形成の大きな基礎になった。記号にすぎないはずのものを多くの人が共有してそこに共感を持つことで、生身の人間が対面的に暮らす集団を越えた、お互いに会ったこともない多くの人が「仲間」、今日で言えば、民族とか国民とか同胞意識を持って集団を作ることができる。そこに資源の再分配システムとか環境改変の技術的な高度化とかが加わって、さらに集団が大きくなり力を持つ。そうして集団の境界の外との落差がいろいろな側面で広がっていき争いも広がる。つまり少数の共同体の段階から文明による集団となったときに、問題が大きくなったのでしょう。

阿部：ということは、「共感」は仲間も作るが敵も作ってしまう訳ですね。あるいは仲間には敵が必要だとも言えるかも知れない。私はよく冗談で言うのですが、紛争が絶えないこの時代であっても、たとえば宇宙人が襲来するとなったら、人類が一つになるのではないか。そんな映画もありましたが、敵の存在を想定しないと働かない共感というのも、貧弱な気がします。

山極：昔、梅棹忠夫先生は、「文化は対立するシステムだ」とおっしゃったことがあります。文化には権威があるだけで良い、指導者も政治組織も必要ない、しかし土地の自然に強く規定されるので、広がることがない、そして対立するものだ。それに対して文明は、様々な社会を包含して広がっていく。そのためには政治組織とリーダーを必要とした。文化というのは本来、地域の自然に合わせて比較的狭い範囲に分立し、その中で生き延びて互いに繋がるものではなかった。それが、人が頻繁に移動するようになると、違った集団の人々に出会うようになり様々なことが起こる。移動手段の発達によって、文化の違いを超えて人を統合する必要が出た。そこで虚構による共通の世界認識を必要とし、政治組織ができ、もちろん農耕牧畜による生産性と人口支持力の向上があって文明ができる。明らかに、それまでとは違う段階に人が至ったと言えます。

文化同士のコンフリクトというのは、関野さんが本の中でお書きになったような、畢竟個人の争いの延長です。ところが文明同士の争いとなると、本来互いに見たこともない、利益が相反するわけでもない兵隊を必要とする大規模な戦いとなる。そこにはすでに共感という世界はない。政治的経済的な目的で対立するものを拡大してしまうわけですから。初期人類のレジリエンスの基礎となってきたという意味での「共感」というのは、地域文化という小集団の段階に止まっているものなのでしょう。

阿部：すると、共感の概念は、文明社会の対立を拡大させてきた政治・経済的な論理を越えては使えないものなのでしょうか。

山極：たとえば戦前の日本を考えれば良いのですが、政治家というのは、なるべく大きな集団を束ねて「みな国に命を捧げよ」と言う。シンボルを使い言語を使い音楽を使い信仰を使いといった具合に様々なメディア(媒介物)を使って、統合しようとする。しかし面白いのは、いずれその矛盾に人々が気づいていく。今の時代でいえば、国の企みを通信情報技術が暴いて、それを SNS が拡散していくようなことがある。このように、「共感」とは別次元の「虚の認識」による統合は、意外と脆く崩れうるものだし、そのときまた共感が、人々をつなぎ問題を解決する力になっていくのではないかとも思うのです。

■「虚の認識」に基づく対立が解消されるとき

山本：共感能力に基づく小集団が結束するには「自分たちとは違う」という外部的な存在が必要ということですが、地域文化の段階、現代で言えば伝統的な先住民社会において、そうした外部的存在を持ちつつも、決して直接的な暴力を振るわない、という関係性をもった人々というのはいるのでしょうか。「敵だ」という風にバーチャルには規定するのだけでも、実質的な暴力は回避しながら内部的な共感を高めるような手立てはないのかということです。ライオンマンを作り出した人々は、動物という人とは違うものを想像力によって上手く取り込んで新しい力を得ようとしたとするなら、仮想的には敵を持つけれども闘わない、そうした思考のフレームワークというものが作れないのか、ということです。

山極：インデックスからアイコンへ、アイコンからシンボルへという表象の進化があると言われますが、匂いや足跡といったインデックスは動物も使います。ホモ・エレクトゥス段階になると、匂いや足跡といった直接的なものとは違うものを皆が共有して印をつけるようになったと言われます。それがシンボルとなると、たとえばライオンマンがそうだと思いますが、集団を表象するものとしてのアイデンティティになる。そのシンボルが闘いを避ける方向に作用する、使われることもあります。本の中で松木武彦さん（国立歴史民俗博物館）も書いておられますが、シンボルに集団の他者への強いメッセージを代替させて「戦わない戦争」を行うというメカニズムはあると思います。関野さんが本の中でレポートされている

儀式的な決闘や先ほど清水さんがおっしゃった婚資のような儀礼というのは、まさにそのことだと思います。それにしても、ブッシュマンやピグミーのような完全な狩猟採集社会ですと、争いの原因になる所有、特に土地の所有の概念がないので、争い自体がほとんどないと言って良いでしょう。

清水：私を知るフィリピンの先住民社会ですと、たとえばアエタの場合、今では狩猟採集ではなく移動焼畑農耕を生業としますが、そのためのテリトリーは確かにあるのですが、常にはそれが重ならないようにして争いを避けている。それでも緊張が高まったときは、どちらかが引っ越して逃げてしまう。要するに、棲み分けと逃避ですね。もちろんそれが可能なのは、土地に十分な人口収容力がありしかも人口も少ないからで、人口圧が低いからではあります。こうした社会では、今申し上げたように、接触を避けるというのが基本ですが、それでも必要なものを手に入れるために接触の機会を持たなければならないときがある。そうした時は「沈黙交易」と言うのですが、互いの境界地点上にモノを置いて、顔を合わせたら喧嘩になるかもしれないので互いに会わないようにして無言のやりとり・交換するというような事例もあったようです。

一方、アフリカの牧畜民の場合ですと、よく知られているように、家畜をめぐる時に非常に激しい争いが起こります。現代ですと、自動小銃まで使う襲撃があります。戦争と言って良いのですが、そうした激しく争う集団間でも、時に深い共感が交わされるときがある。文化人類学者の曾我亨さん（弘前大学）が目撃したのですが、疲れ果てたトゥルカナの旅人が夜更けにガブラ・マルベの村を訪れ一夜の宿を乞うたというのです。トゥルカナとガブラ・マルベはいずれも東アフリカに暮らす牧畜民ですが、互いに激しく敵対していて、このときも民族紛争が終結したばかりで、この村でも青年がひとり殺されていた。誰もが互いに敵と見なしていたのですが、よほどの事情があつて村を訪れたトゥルカナの旅人の顔を見たガブラ・マルベの村人は深い同情で応えたというのです。対面的な相互作用は、人びとにみずみずしい経験をさせ、それが互いを敵とする参照基準を弱めたり、後退させたりという方向に作用するのだと、曾我さんは論じています。たとえ実際に人が殺されたという事実があっても、もともと「虚の認識」に基づく対立というのは、具体的・対面的な言葉と身体のやりとりの中で解消されるということは確かに言えるのではないかと思いますね。

稲村：集団間の敵対と連帯という点で文化人類学ではマリノフスキーが研究してよく知られていることですが、ニューギニアの近くの島々で行われているクラ交易というのがあります。何百キロという離れた島々の間で人々がカヌーで順番に他の島に渡り、貝でできた装飾品、白い腕輪とピンクの首飾りを交換するものです。物と物の交換ですが、生活必需品の物々交換のような取引ではなく、要するにしくなくても良い交易を、船団を作って命がけで行う。こんなことを何故行うのか、人類学者はずっと考えてきて、マリノフスキー以来、モースの『贈与論』やボランニーの『人間の経済』論に繋がっていくわけですが、一言で言えば、

それをしないと闘いになってしまうからだろうということなのです。非常なエネルギーをかけた儀礼的な交易によって、贈り物と奉仕の相互交換の関係を生み出し、遠く離れた人間を直接間接に結びつけ、義務のやりとりという複雑な規則を人々が守る。またこれによって、他の品物や習慣、歌などの芸術も伝えられる。貝の装飾品は、それぞれの島のリーダーに一時的にしか所有されないのですが、この所有によって彼らは名声を得られ、交易にまつわる功績や逸話が共有される。競争心、所有欲、名誉欲のようなものがシンボル化されているのですね。隣り合った集団ですと接触をしないというのも一つですが、島だと逆にお互いがどんなものか全く分からないから、あえて儀礼的な交易をすることでお互いを理解し合う。

さらにレヴィ＝ストロースは、クラ交換の円環性にヒントを得て外婚制というシステムの意味に気づく。女性は集団内では結婚できないような仕組みを作り、外の集団に嫁がせることで、インセスト（近親間の性的関係）も避けられるし、結婚による女性の移動を通じた集団間のネットワークを形成することができる。それによってやはり円環的な形で、多くの集団が結びつくというメカニズムですが、こうした知恵を伝統社会は作ってきたのですね。近代文明はそうした知恵を作れていないと言うことができると思います。

中原：さきほど清水さんが「沈黙交易」のことを紹介されましたが、クラ交易においても、最初は、「これは素晴らしい首飾りだ」と自慢したり、あるいは相手の普段の行為に文句を言ったりというような、腹を割った対話が儀礼的に行われるのですが、交換の最終局面では、淡々とモノのやりとりをするのです。感激を表したり、あるいはやっぱりもっとよこせというようなことは言っていない。

山本：それに関連すると思うのですが、コンフリクトを避けるために会わないというのは中世の悪疫（一般にペストと呼ばれた）の流行時に見られるのです。悪疫が流行っている村では、村と村の境界に、井戸の水で綺麗に洗ったお金を置く。すると別の村の人々が食糧を持



フランスの画家ニコラ・ブッサン（1594 - 1665）の『アシドドのペスト』。ヨーロッパをたびたび襲った悪疫のパンデミック下でも、「伝染させない」という利他的行動が見られた。

ってきてお金を持って帰る。これは自分たちが苦しんでいる感染症を外に感染させないという他利的な行為だと賞賛されたのですが、よく資料を読んでもみると、そうでなくて、悪疫の流行時というのは色々なコンフリクトが起こるのです。外から攻撃されたり火が放たれて村が焼き尽くされたりといった可能性ですね。たぶんそれを回避するために、利他的なしかも接触を避けるという形で行動した。結果的にその村では半分くらいの人が亡くなるのですが、それをしなかったらもっと多くの人が殺されただろう、また外部からはあの村は実に利他的であるという風に賞賛されたというのですね。

清水：先ほどはコンフリクトを避けるために接触しないという事例を挙げましたが、逆の方向の事例もあって、沖縄戦におけるチビチリガマの集団自決はよく知られていますが、そこから少し離れたシムクガマでは、ここには1000人の住民が入っていたそうですが、集団自決が起こらなかった。アメリカ兵の投降勧告に対して、チビチリガマと同様、誰も出て行かず自決しようという意見が村民の間で広まっていった、警防団員らが竹槍を持ってアメリカ兵へ突撃しようと動き出した。その時、ハワイ移民に出ていて沖縄に帰っていた住民が彼らを止めた。アメリカ人に捕まると、男は去勢され女は乱暴されると多くの人が信じてしまっていたのだけれど、そんなことはない、アメリカ人は優しいし良い奴もたくさんいるからと言って、自分がガマから出て行ってアメリカ兵と対話する。そして、抵抗しない限り殺さないと言っていると、村民たちを説得した。その結果、全員が投降してアメリカ軍に保護された例があるのです。

先ほどのトゥルカナとガブラの例もそうですが、具体的な顔を突き合わせた生身の人間の相互行為の中で「虚構」の信念の上に形作られたコンフリクトが解決することがあるのです。集団と個人というレベルの違いもあり、それが他者認識の階層構造にどう位置づけることができるのか、僕も思案しているのですが。

■「争い」をめぐる自己／他者認識

山極：僕がゴリラを追いながらピグミーの人たちから学んだのは、彼らは何とかトラブルがあると、移動してそこからいなくなるのです。村の単位は小さいのですが、人が移動する範囲はかなり広くて、半年か1年くらい遠くにいて、また戻ってくる。そうすると、お互い喧嘩は忘れている。ほとぼりが冷めるという言葉がありますが、彼らは閉鎖的な空間にいるのではなく、常に流動して問題を解決しているということが、よく分かります。

稻村：移動性というのはとても重要なことで、モンゴル遊牧民の場合も離合集散して、そこには気候などの自然要因もあるけれど、社会的要因もとても大きくて、仲が悪くなりそうだなと思ったらゲルを分けて、他の家族とくつつくなんていうこともよくあります。

中原：マーシャルもそうですね。仲が悪くなると、同じ環礁の中の別の島に行ってしまうということとはよくあります。

稲村：人々が移動できる社会ではそれはできるのだけれども、定住性が強くなると難しくなっていく。その点で、関野さんが本の中で紹介されたような、争いを儀礼化するというのは、また別の解決の形ですね。

関野：ただそこには、やはり自己／他者認識の問題があって、ヤノマミは集団同士で戦争もするしそれを非常に儀礼化した形でも行うけれど、あくまでそれはヤノマミと自らが呼ぶ社会の中だけなのですね。よく知られているように、「ヤノマミ」とは、北極圏の「イヌイト」と同様、「人間」という意味です。彼らにとって、自分たちヤノマミだけが人間でありそれ以外は全部「ナボ」と呼ぶ「人間以外」なのです。そして、「ナボ」は、戦争や儀礼化された争いの対象にすらなりません。

これに関わってかつて衝撃的な事件が起こりました。ヤノマミと同様、アマゾンに住むマチゲンガという人々がいるのですが、彼らはペルーアマゾンの源流部に暮らしています。その村に、あるとき、ペルーアンデスで遭難した白人3人が迷い込みます。食糧も銃の弾も無いガリガリに痩せた姿ですが、一人は身長が190センチあって、そうした白人の姿をマチゲンガは見たこともない。そこで彼らは村から逃げ出し森の中から遠巻きにして3人の様子を見ていました。村に人がいれば、白人たちも別の振る舞いをしたと思うのですが、誰もいないので勝手に村を占拠して畑を荒らし始める。その様子を、マチゲンガが見ています。「自分たちの言葉とは違う言葉を話す」奴らが、畑を荒らし、ついには家禽の鶏を殺して食べ始めた。そこで奴らを殺そうということになり、マチゲンガは、アマゾン源流の岩がゴロゴロしている河原を移動している3人の白人を襲う。問題はその襲撃の際、マチゲンガは弓矢を使っていないのです。「マチゲンガ」も「ヤノマミ」と同様、彼らの言葉で「人間」という意味です。そして弓矢は人間同士が争ったり獲物を獲るときのものであって、3人の白人は「人間以外」ですから、石でもって叩き殺してしまったのです。同じ仲間の間なら、戦争も儀礼化していけるのだろうけれど、相手が「人間でもない」とすれば、争いにもならず単なる殺戮になる。

山極：1960年代にシカゴで狩猟採集民に関する国際会議があって、そこで人間の攻撃性に関するパラダイムシフトが起こります。それまでは人間の攻撃性は狩猟によって高まったという意見が大半で、そうした立場から「狩猟採集民は攻撃性が高い」という問いがなされたのです。ところが、ブッシュマンやピグミーの研究者はそれに反対して、狩猟という経済的行為と争いというのは全く違う行為であることを実証的に示したのです。

関野：『戦争の研究：武力紛争と攻撃性の人類学的分析』という有名な本があって、日本語でも翻訳出版されていますが（ぺりかん社、1970年）、そこでいろいろな分野の研究者が議論して、大半の論者は「土地」（資源）が争いの原因であるとしたのですが、一人、ナポレオン・シャグノンというヤノマミの研究者がそれに反対した。先住民社会では土地は争いの種にはならない。実際、ブッシュマンもピグミーもアメリカ先住民もみなそうですが、彼らにとって土地は誰のものでもない。みんなの共有のもの、あるいはもっと超越した神や祖霊といったもののものであって、だから土地をめぐる争いは起こりえないのです。そうではなくて、女をめぐる争いもその典型ですが、人間の尊厳をめぐる争いは争う。そうした自己／他者認識を考えないと、争いを避けるための本質的な議論にもならない。

■リーダーシップという鍵概念

山本：そう考えると、さきほど清水さんがおっしゃった、沖縄戦のチビチリガマとシムクガマの違いという話は大変示唆的ですが、その際、シムクガマで住民の説得に当たった人が、なぜそれに成功したのかを考えることも大事だと思います。いくら外の世界を知っていると言っても、それだけでは説得できない。無視されたり、場合によってはその人自身が殺されてしまうことだってあり得る。そこに何か鍵がないか。

清水：沖縄の例についてはそれ以上のことは詳しく存じ上げないのですが、私が知っている先住民のどの社会でも、必ず「良きリーダー」という人がいます。他の世界を知っているあるいは他者への好奇心・包容力がある、ということが基礎にあるのでしょうか、豪腕をもって支配するというのとは違って、合意形成をうまく導くような、一言で言えば人徳がある人が、集団のリーダーになっています。またそうした人は、過去のコミュニティの記憶をよく引き継いでいて、語りが上手という共通点もあります。

私が長く関わってきたルソン島（フィリピン）北部の山奥に暮らしてきたイフガオ族のリーダーであるロペス・ナウヤックさんや、その盟友で、フィリピンの超エリート社会から脱して先住民の中に身を置いたアート・アクティビストのキッドラット・タヒミックさんなどは、その典型でしょう。お二人とも、まったくアグレッシブではなくて、いつも笑みを浮かべている。すごくオリジナルなアイデアを持っていて時に夢みたいなぶっ飛んだ話をするのだけれども、決して押し付けず、まずは人の話をよく聞く。だから若者たちに慕われ、お神輿に担がれるといったタイプです。

ところが、そこに中央政府が市町村制のようなきっちりした行政機構をつくるようになると、学歴のあるこざかしい奴が例えば州知事に任命されたりして、かえって色々な問題が起こることが結構ある。つまり、伝統社会におけるリーダーシップは、危機を乗り越えることを考える上で、重要な要因ですね。



ドキュメンタリー映画監督で国民芸術家 (National Artist), そしてアート・アクティビストのキッドラット・タヒミックが、フィリピン・バギオ市で開催した第3回KAPWA国際会議³「アカデミズムにおける原住民の知識：ローカルとグローバルを結ぶ」で、孫を抱いて挨拶をする。左に座るのは、ネイティブ・アメリカンのデニス・バンクス⁴ (2012年6月27日, 日丸美彦氏提供)。



1990年代の半ばから北ルソン山地イフガオ州ハパオ村 (世界遺産の棚田で有名) と近隣地区で住民主導の植林と文化復興の運動を始めたリーダーのロペス・ナウヤック。KAPWA国際会議の歓迎レセプションで地元先住民の代表として挨拶をする。イフガオの長老としてキッドラットのグル (精神的な導師) であり, また彼の文化運動の協力者で同志でもある。(2012年6月27日, 日丸美彦氏提供)。

山極: アフリカで私が付き合ってきた伝統社会の人々は、文字を持ちません。そうした無文字社会の集会に出てみて気づくのは、何が説得に重要かという点、「たとえ話」なんですね。「たとえば過去にこうしたことがあった、その時はこんな風に解決した」という語りですね。

山本: その点、微生物の世界だと、リーダーがいらないのに振る舞いを変えます。ある腸内細菌がそれまで無害だったものが、数が増えると突然振る舞いを変えて人に害を及ぼす。その時にはリーダーはいない。リーダーシップというのは、進化の過程で生物、とりわけ人が獲得した重要な要素かも知れませんね。

■食と性——サルの共同体と人の共同体の大きな違い

山極: 先ほどオスの暴力を抑えるために群れを作ったと言いましたが、今の議論に関わって言葉を足すと、群れを作る社会でもオスは単独生活をするんです。しかしメスは絶対に単独生活はしません。保護者が必要なんですね。このことを考える際に重要なのは、オスの連携

³ Kapwa (カプワ) とは、タガログ語で「つながり」を意図して相手に語りかけるときに使われる言葉。キッドラットとナウヤックの思想と運動については、清水展 (2013) 『草の根グローバリゼーション：世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』京都大学学術出版会、参照。

⁴ デニス・バンクスは、1973 年のウーンデッド・ニー (第7騎兵隊によるスー族虐殺戦の現場) 占拠に象徴される先住民の権利と尊厳の回復を目指す運動の指導者。

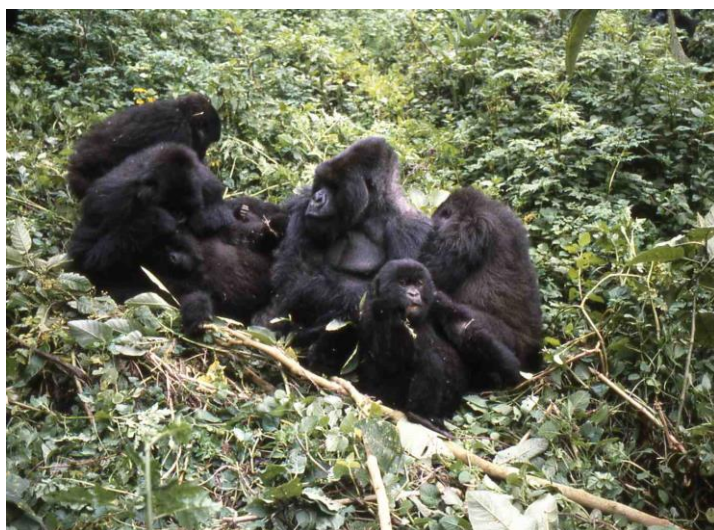
による暴力か、オスの個体による暴力かという問題です。サルの社会では、オスによる子殺しという例がしばしば観察されて、それは別のオスの遺伝子を引く子を殺すことでメスの発情を生起させ、その結果、自分の遺伝子を残していくという繁殖戦略だと説明されます。これは霊長類社会に広く見られることで、おそらく人類もその性向を引き継いでいます。けれども次第に、オスのそうした性質を順化させていったと考えられる。つまり、オスの暴力では支配できないということが、分かっていったからです。

先ほど中原さんがおっしゃったように、確かに伝統社会でも男の支配力は強いのですが、女も力を持っていて、時に男を制裁することがある。そうした慣習がやがて法や制度になっていく。こうしたことが積み重なって今の社会ができた。つまり、単に豪腕ではやっていけないということが分かっていく、という流れでしょう。

関野:先ほど私はヤノマミの争いの原因が女の強奪にあると言いましたが、その場合でも、女性はちゃんと合意して行くのです。だから駆け落ちと言った方が近い。そうでないと、女としても、別の集団の中で自分を掠っていった男の庇護が受けられませんから。

山極:類人猿の社会でオスの暴力が無い社会というのは、社会集団のあり方の二つの極にあります。一つは、雌雄が完全なペアを作るもので、これがテナガザルの社会です。テナガザルは雌雄の体つきが一緒に、類人猿以外の霊長類でも、ペア社会は例外なく雌雄の体格差はありません。この社会には子殺しもあります。もう一つの極は、完璧な乱交社会で、これがボノボです。この間にあるのがゴリラとチンパンジーです。オスがメスを所有したくても所有できない社会と表現しても良いでしょう。

つまりなぜオスが暴力を振るうかと言えば、オスは自分で繁殖できませんから、できるだけ多数のメスを妊娠させたいという願望がある。ですからそのために無理矢理メスを発情させるために子殺しまでする。ただ、これは非常に重要なことですが、いわゆる「レイプ」



ゴリラは1頭のオスと複数のメスや子どもで家族的な集団を作る。それに対し、テナガザルは雌雄が完全なペアを作り、一方、ボノボは完璧な乱交社会でオスがメスを所有したくても所有できない社会を作る。

はありません。それはメスが発情しなければ、オスは交尾できないからです。人間だけがこの特徴を無くした。これがいつのことかは分かりませんが、おそらく、家族と複数の家族という共同体を作ったからでしょう。そうした集団の中に、一人でも発情兆候を持つ女性がいれば、多くの男がそこに群がってしまう。そこで、女は発情兆候を隠すことが必要だった。そして性交渉は家族の中で止め、乱交はしないという掟ができる。さらにインセスト・タブーが堅く守られたからこそ、馬場さんが本の中で描かれた人の共同体が保たれたのではないのでしょうか。

清水：今のお話は、人間社会に特徴的な共食を考える上でも重要ですね。動物だと、普通は一人で食べるけれども、求愛給餌のように、オスがメスに求愛するときは食べ物あげる。人間は食べることは一緒に大っぴらにするけれども、セックスはひっそりとする。しかも、メスは発情サインを消す。

山極：まさにその通りで、霊長類の社会性を逆転させているのが人です。サルにとっては食べるというのは個人的な行為ですが、性は大っぴら。発情サインも明瞭です。人は、その逆になっているのです。そうしたサルとは違った社会のあり方が、さらに制度化されて今に至った過程というのは、レジリエンスを考える上で、すなわち人の強さと弱さを考える上で重要でしょう。

■この時代の危機を「良性の危機」として考える

稲村：いま話題になった「食」というのは、本の中でも、最後のパートである Phase V の重要なテーマになっています。ただいきなりそこに話を飛ばすと端折り過ぎますので、まず、こうして進化してきた人の社会が、いま何に直面しているのか、改めて整理してみたいと思います。

馬場：僕は地球環境問題の専門家ではありませんが、一市民の感覚をもってしても、もはや地球は大変なことになっている。人口が急増し、自然資源は早晩枯渇することが見通され、どんどん拡大して環境を悪化させてきた農地自体が劣化しようとしている。いまこの時に何か手を打たないと、温暖化はもちろんですが、たいへんな争いが起こることも目に見えている。もちろんそうしたことは中学校の教科書にも書かれているのだけれども、具体的な施策としては明確に示されない。SDGs (Sustainable Development Goals) といった「目標」(Goals) が掲げられるけれど、あれが根本的な解決にならないことは私にも分かります。「現状維持」ではもはや駄目だということは、理屈としては分かっている。そうした中で、我々研究者が黙っていて良いのか、それこそ地球研がまた日本学術会議が——その両方のトップであり、あったのは山極さんですが——本気で提案をする必要がある。私がこの場に

いるのも、化石の研究に閉じこもっているのではなく、環境問題は素人だけれども、何か自分の専門から提案できないのかという強い思いなのです。

山極：科学者としての我々が今言うべきことは、これまでのように科学技術で危機を乗り越えるという思考では、問題を悪化させるだけだということです。科学技術はこれまで人類の厚生・発展に役立ってきたことは確かだけれども、これから先、科学技術で問題を解決しようとする、さらに地球に負荷をかけてしまうのは明らかです。であれば、我々の歴史を遡ってそこから何を学ぶのか、過去に人類が経験した変革や変動、そこで人類が手にした能力から我々が何を学ぶことができるのか、何を活かせるのか、どこで間違ったのか、知的に考えることが私たちの役割でしょう。

阿部：危機という言葉は、両面があると思うのですね。地球環境問題やコロナ禍は、同じ根っこを持っていると私は思いますが、この危機を「良性の危機」として考えられないか、というのが、本の中での私の提案です。この危機をきっかけに、もっぱら科学知や技術力に頼るのではない新しい世界を創造していく、いままでの社会のあり方を変えていく。文字通りそれはトランスフォーマビリティ、転換力ですが、今の危機を契機にしていくためには何が必要か、それを提起することが我々科学者の責務ですね。

稲村：その点で、自然災害というまさしく目の前の危機に、医師として専門家として何度も立ち向かわれたのが山本さんですね。また中原さんも、水爆実験の被災という人が作り出した災害についてフィールド調査をされている。

山本：たとえば2011年の東日本大震災の際には、翌々日に被災地に入り、1ヶ月間救護活動に携わったわけですが、その間のこと、天気の良い日に海辺に出てみると、陸の方は津波で本当に全てが流されてしまっているのですが、海の方はとても美しく静かで、その瞬間、「自然との共生」という言葉を我々口にしてきたけれど、真剣にそれについて考えてきたのか、と心から思いました。自然はこんなにも暴力的だけれども、こんなにも美しいのだ、ということですね。まさしく両面を持っている。ところがそれから10年経って被災地を訪れてみると、多くの場所で10メートルを超えるような防潮堤が立って、海が見えないまち作りが進んでいる。これが答えだったんだろうか？ と強く思うわけです。もちろん僕はそこに住んでいないので、当事者ではないのだけれども、何か違う？ という感覚は否めない。

中原：本の中に書いたように、マーシャル諸島には、自然災害に対応する知恵というものがあったのですね。別の遠い環礁とも親族関係や身分関係で繋がっていて、それが地域的な自然災害から再生していく基礎になっていた。ところが、水爆実験による放射能汚染や地球温暖化には、そうしたローカルな知が役立たない。放射能汚染も温暖化による気候変動や海面

上昇も、その影響がこれまでの自然災害とは比べものにならないくらいに広範囲だからです。そこで人々は、先ほどのシムクガマの話ではありませんが、ローカルな人の結びつきを越えた、外の世界と繋がりながら乗り越えようとしている。特に放射能汚染の問題はそうして解決してきたのだと思いますが、ローカルな知を活かしながらも、今の時代の危機は、これまでの枠組みを越えた、新しい発想が重要になっているのだと思います。

■大地に足の着いた感覚の共感を広げるには

関野：私が国立科学博物館で、馬場さんと篠田謙一さんに共同監修者になっていただいて特別展「グレートジャーニー」（2013年3月～6月）を開催した、そのサブタイトルが「この星に、生き残るための物語」だったのです。その時、主語を付けなかったのです。普通は「人類のことだね」と思うらしいのですが、私の思いは全ての生き物です。だって、他の全ての生き物がいなかったら、人類だけでは生存できないのだから。先ほど自然の両面性と山本さんがおっしゃいましたが、自然は多神教の神と似たところがあると思うのです。インドの神様も日本の神様も、時に人間を懲らしめたりする怖い存在だけれども、無くてはならない恵みを与えてくれる。で、「罰を与える」という言葉があるけれど、神が怖い存在となるときは、何かしら我々の側に問題があるときです。その点で、2019年以降のコロナ禍は、明らかに開発という悪さに対する自然・生き物の側からのリアクションです。エイズにしても同じですが、必要以上に自然を改変し接触しなくてもいいのに、それをしてしまったために、新たなウイルスに接触してしまった。科博での展示のサブタイトルには、そうしたメッセージを込めたのです。

いま僕は「地球移住計画」というプロジェクトに取り組んでいます。科学技術至上主義の発想のもと、いま「火星移住計画」というものがある。でも皆さんご存じのように、地球はほとんど奇跡的なハビタブル・プラネットです。太陽との距離、サイズ、月の存在、大気、そして磁場……それのどのバランスが違っていても、これほどに生命は豊かにならなかった



関野と馬場らが中心になって企画した国立科学博物館の特別展「グレートジャーニー 人類の旅」（2013年）の会場より。特別展のサブタイトル「この星に、生き残るための物語」にはあえて「人」という主語は付けられていない。（2013年6月4日 稲村撮影）

た。つまり生命は何重にも守られている。特に磁場はオゾン層ほどには一般の人は気づかないようだがとても大切です。

太陽フレアが起こると強い磁場と大量のプラズマ⁵が一気に宇宙空間に放出され、地球の方へも飛んできます。そうすると地球にも影響を与えます。人工衛星が故障して様々なシステムが使えなくなり、私達は放射線に被曝しますが、磁場が太陽からの高エネルギーの放射線を遮ってくれています。火星には2年掛けて行けますが、そこに行くだけで被曝してしまいます。男も女も、火星に着いたころには生殖能力を失っている。火星移住計画よりも、この奇跡的な地球に住み続けることを考えた方が良いというのが「地球移住計画」の趣旨です。

そのプロジェクトの一環で、いま玉川上水で映画を撮っているのですが、そのタイトルは「死体とウンコの復権」です。その主人公は糞虫とシデムシで、みんなが忌避する虫だけでも、彼らがいなければこの地上は死体とウンコだらけになってしまう。玉川上水というコンパクトな環境だけでも、その中で生命が環になっていることが実感されます。しかし一種だけ、その輪から離れているのが人間です。このことを伝えたいのだけれども、その媒体を映画の芸術性に託したのは、アートには力があると思ったからなのです。山本さんもアートに強く関心があると先日伺ったのですが、科学知をアートで表現する。サイエンスの成果を論文で発表するだけだと、ほとんどの人には伝わらない。でもアートにはその力があると思います。私は大学教員として勤務していたのが武蔵野美術大なので、アートがいかに人を動かすのかということは、肌身で感じています。

実は、東チモールの独立やアフガニスタンの軍閥の武装解除など世界各地の紛争地で紛争処理にあたった平和学の伊勢崎賢治さん（東京外国語大学・コスタリカの国連平和大学）をうちの大学にお招きしたことがあるのですが、その時彼が、「関野さん、将来何をやるの？」とおっしゃる。何を言い出すのかと思ったら、伊勢崎さんはトランペットを吹かれるのですね。また小学校の頃は、毎年絵画の全国大会で入選したのだそうです。つまりアートの力を知っている。今はコスタリカにある国連平和大学などでも活動していますが、平和学をアートでやりたいと言うのです。ピカソのゲルニカは有名ですね。「一緒にやりませんか」と誘われましたが、僕も「地球移住計画」を武蔵野美大を拠点に行っていますので、地球環境問題をアートで伝えたいと思っていますところです。

阿部：アートは社会を変える力がありながら、地球研では十分考慮してこなかった。それでも遅まきながら2022年3月、年に一度の地球研国際シンポジウムでアートを取り上げることにしました。テーマは“Art of Living with Nature”。アートという概念が技術も芸術も含んでいたことを振り返りたいと思っています。理屈でなく感性の重要性にも触れることになります。そこで再び共感について考えてみたいのですが、以前山極さんが僕と対談した際に

⁵ 原子核と電子がバラバラになり、それぞれがプラスとマイナスの電荷を持った粒子として動き回っている状態。

話されたのですが、あるときアフリカの人を屋久島に連れて行った。彼らが、それまではどこか日本では「お客さん」だったのだけれど、靴を脱いで素足で屋久島の土を踏んだ途端に、「おお、一緒ではないか」と目を輝かせたという話をしていましたね。そこに可能性がある。共感には両義性がある、仲間どうしの共感是他者への境界をも作ってしまうということが話題になりましたが、そこを乗り越える鍵がこの話にあると思う。大地を介することで、どこに住もうが、同じ我々であるという感覚を持てる。大地、まさに地球ですが、地球環境問題というのは、危機ではあるのだけれども、自然を媒介として我々が共通の意識を持てる「良性の危機」であると、改めて思えるのです。

その対談では、「環境問題は、もしかしたら人類が靴を履いたときに始まったのかな」という話も出ましたが、人類がどこで間違ったのかを考える上でも示唆的だと思いますね。

山極：地球の生命圏というのは、せいぜい地下 10 キロ、地上 20 キロまでなんですね。生命はそのわずかな範囲にしか生息できない。中でも重要なのが土です。その土の中に、関野さんがおっしゃった、シデムシやらミミズやらフンコロガシやらが一杯いて、我々が排泄したものや死骸を分解して、それをまた生命圏に送り返すという循環をしてくれている。大地はそういうことをしてくれている。我々は二足歩行をして大地から立ち上がったけれども、まだ裸足でそこに接していた。しかし靴を履いたことで、土の感触から次第に遠ざかっていく。土を通じて、植物だとか微生物だとかとも通じ合っていたと思うし、何よりその大地を作っている材料で人の身体は作られていた。ところが今やどんどん足下の土から離れて、今の我々の身体を作っているものの中には、全く自然界にはないものもあるし、あるいは遠くの土地からやってきた物質もある。我々が死んでも、足下の土には返らないかも知れない。

いま地球研では、エコヘルスとか、EcoDRR (Ecological Disaster Risk Reduction：生態学的な防災・減災) というプロジェクトに取り組んでいますが、自然の力を見直して、自然の力を活用しながら来たる災害に備えようという発想です。山本さんが 10 メートルの防潮堤の話を紹介されましたが、その場しのぎの障壁で災害を防ぐのではなく、自然とコミュニティの力を利用して、「災害を災害でなくする」ということを人間は伝統的にやってきたわけですね。本の中でもいくつか紹介されたような、在来知を活かした取り組みをすることで、大量生産、大量消費、大きな構造物を作って取り囲むことで自然から我々を切り離して、かりそめの「豊かさ」と「安全」を確保するのではなく、自然と一体になって天変地異と共存していこうという思想が必要ですね。

稲村：2008 年 7 月に「主要 8 か国」(G8) による洞爺湖サミット (第 34 回主要国首脳会議) が開かれたときに、同じ時期、同じ北海道の沙流郡平取町公民館や萱野茂二風谷アイヌ資料館などで、萱野志朗さんが統括代表となって「先住民族サミットアイヌモシリ 2008」が開かれました。アイヌの人たちが世界中から先住民の代表を呼んで開いたものでしたが、私は以前勤務していた野外民族博物館リトルワールド (愛知県犬山市) の展示家屋「アイヌ

の家」の建設を志朗さんのお父さんの茂さん⁶にお願いした縁で、シサム⁷として参加しました。開催初日、世界 11 カ国 24 民族の 26 名の先住民がスピーチを行ったのですが、ヴィクトリア・タウリ・コープスさん⁸の基調講演はとてもインパクトがありました。彼女は、洞爺湖サミットの議題である環境問題・気候変動について、「G8 の国々こそが、帝国主義～新自由主義を通してそれらの問題を引き起こしてきた」と指摘し、そうした課題の解決のためにも、国連宣言を実行し先住民族の生き方や考え方を尊重すべきだと述べたのです。もう一つ印象的だったのは、先住民族のみなさんの共感力の豊かさです。分科会（ウコチャランケ：アイヌ語で井戸端会議）に分かれて議論するのですが、話しているうちに、自然に踊りの輪が始まるのです。

それに感動したものですから、志朗さんと諮って、2010 年、愛知で COP 10（生物多様性条約第 10 回締約国会議）が開かれたのに合わせて、当時勤務していた愛知県立大とリトルワールドと愛・地球博記念公園等で、「先住民族サミット in あいち 2010」を企画しました。北海道に続いてカナダで予定した「先住民族サミット」が開催不能となったため、それ



「先住民族サミット アイヌモシリ2008」で一堂に会した、世界11カ国24民族の先住民族。多様な出自の人々があつという間にわかり合えるのは、文字通り地に足を着けて生きている人々が持つ「共感力」ゆえであろう（参考：世界先住民族ネットワーク（WIN: World Indigenous Peoples Network）－AINU事務局刊『「先住民族サミット」アイヌモシリ2008報告集』）



「先住民族サミット in あいち 2010」の際、リトルワールドの「アイヌの家」で行ったカムイノミ⁹。このサミットには、多くの先住民族の参加者と共に、文化人類学などの研究者、市民が参加し、フォーラムだけでなく、民族音楽・舞踊・儀礼など多彩な形での文化交流を実践した（参考：愛知県立大学多文化共生研究所刊（2011.3）『共生の文化研究』5（特集：先住民族サミットinあいち2010））

⁶ 後にアイヌ民族唯一の国会議員となった萱野茂。

⁷ アイヌ語で「よき隣人」の意味。

⁸ フィリピン人のイゴロット族の出身で、国連・先住民族問題に関する常設フォーラムの議長を務めた。

⁹ アイヌ語で「カムイ（神）に祈る」という意味。アイヌにとっては、この世に存在するあらゆるモノや自然現象などにカムイが宿っている。

に代わる取り組みでした。清水さんと阿部さんにもそこで話をして貰いましたが、学者による会議ではなくて、あくまで先住民族同士の交流であり、そこに学者も加えて貰うという形でした。驚いたのは、先住民族の人たちの、垣根を越えた連帯の素早さです。まさに、靴を脱いで同じ大地を踏みしめている仲間どうし、という感覚ですね。近代文明の中で育ってきた者とは、まるで違います。在来知を活かすという話が出ましたが、個々の在来知ももちろんそうだけれども、先住民社会が共通に持っている知恵がある。我々は科学知を否定することはもはやできないけれども、科学知と伝統知をどうすり合わせるかということはできるはずです。私にとって『レジリエンス人類史』の発想の原点のひとつが、この「先住民族サミット」の体験にあるのは、間違いありません。

■SDGs に根本的に欠けているもの

清水：もはや、はっきりと我々が主張するべきだと思いますね。いま、世界はSDGsが盛んになっている。しかし、馬場さんもおっしゃったように、SDGs (Sustainable Development Goals) によって覆い隠されてしまう部分もある。Development Goals, つまりは「ゴールは開発」ではないですか。レジリエンスを人類史から考えてみて改めて思うのは、たかだか1万年前の農業革命, 200年少し前の産業革命によって今に至った現在をまるで当然のように思って、その惰性の中で「開発」を「目標」とする。もちろん女性の社会進出とか社会的な目標もあるけれども、突き詰めれば経済成長で「成長すれば良いことがありますよ」という「開発路線」はそのままにされている。そうではなくて、実は人類史の長きに亘った、人と自然が一体であった時代の「成長」「開発」「豊かさ」とは何かを、今あらためてちゃんと考えてみるべき時ではないでしょうか？

僕にとっての手がかりは二つあって、一つはマーシャル・サーリンズの『石器時代の経済学』, もう一つは僕自身が接してきたピナトゥボ・アエタの人々です。サーリンズの本はもう50年前のものですが、狩猟採集民の豊かさの根幹には、十分な自然資源の中で、少なく



ペルーアマゾンに暮らすマチゲンガの人々は、イモやバナナの皮、壊れたカゴや敷物、ヒョウタンそして灰も集めて森に捨てる。糞尿や死体も自然に返す。それらはコケや地衣類、キノコ、植物の養分となり、自然の循環の一部となる。自然の循環の輪から遠く離れてしまった都市民の対極にある。(関野撮影)

要求し少ない労働投下で満足を得ることだったと指摘している。そうした自由と豊かさが人類史の大部分にあることは、まず抑えておく必要がある。

稲村：もちろんそこには人口規模の違いがあるのだけれども、「Development」をゴールにしないという発想の転換が大事ですね。劇的には人口も減らせないしエネルギー消費も減らせないが、ソフト・シュリンクの道はある。

山極：なにより人類が地球の生物の一員であるためには、自然のロジスティック曲線を守らねばならない。ところが我々は、農業革命や産業革命によって、ロジスティック曲線のサチュレーション（飽和ライン）の部分をどんどん上へ上へと押し上げてしまった。人口はもちろんですが、家畜も今やそれぞれ10億頭を越えるくらいの数になっている。その結果、地球の陸地の4割以上は、もはや牧草地と畑地です。多様な生命が暮らす部分は、人工林も含めて3割しか残っていない。人口を抑制しようと言うと当然途上国から反発が出ます。発展を享受した先進国の発想ですから。しかし、日々の生活を自然に合った形に直していくこと、生態系に調和した安定した中に幸福を見いだすことはできるし、その工夫を具体的に提案していくことでしょう。

SDGsに問題があることにはもう若い人は気づいています。先日、京都市北部の京北町で、SDGsについてのシンポジウムを行いました。そこで、高校生から「今、企業がSDGsのどの目標に取り組んでいるということを盛んに言うけれど、それは言い逃れではないですか」という質問が出ました。僕はそのとき、こう答えたのです。「20世紀の後半というのは大変な時代だった。先進国は権益の争奪を競って争い、資源を搾取し、紛争や公害、環境破壊が頻発した。それがやっと2015年になって、各国が合意して「持続」を共通のスローガンとして、誰一人取り残さないというかけ声を上げて取り組み始めた。だから、このこと自体は決して非難すべきことではない。しかし、SDGsには決定的に欠けている事柄があって、それは〈文化〉だ」と。

「文化」という言葉は、SDGsの17の目標には出てきません。169の達成基準の中に二つだけ出てきます¹⁰。これをやっと入れることができたのは、前の地球システム・倫理学会の会長で、長くユネスコに勤務されユネスコ事務局長顧問だった服部英二さんの努力でした。ではなぜ「文化」がSDGsの目標になれないかといえば、先ほど申し上げたように、

¹⁰ 4.7 項「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、世界的・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。」8.9 項「2030年までに、雇用創出、地元の文化・製品の販促につながる持続可能な観光業を促進するための政策を立案し実施する。」

「文化」は世界単一のものにはならないのです。やはり服部さんが尽力されたユネスコの「文化的多様性に関する世界宣言」の中では、第1条に「時代、地域によって、文化のとり形態は様々である。人類全体の構成要素である様々な集団や社会個々のアイデンティティは唯一無比のものであり、また多元主義的である」とまさしく書かれていて、つまり、文化とはそもそも多元的で一つの目標にはなりにくい。文化というものは、その土地の自然と切っても切り離せないものだからです。同時に、おなじ第1条は「生物的多様性が自然にとって必要であるのと同様に、文化的多様性は、交流、革新、創造の源として、人類に必要なものである」と結ばれている¹¹。この2点は非常に大事です。

いま、世界中の都市は、文字通り金太郎飴のように、鉄とコンクリートとガラスという均一の素材で作られ、同じような景観が広がっている。そうではなく、都市であっても、その土地の自然の要素・素材をきちんと取り入れて、自然に優しい都市作り、暮らしができるようにデザインしていく必要がある。その点でアートの発想はとても重要です。アートは情報になりませんし、計算もできない。現代は、計算できるもの情報になるものばかりをかき集めて、それに頼って暮らしている。情報化できるもの、計算できるもので考えるのが、主流派経済学の発想です。本来は数値化しにくい教育とか健康とか幸福とかについても、ともかく無理矢理にでも市場に置き換えて、コストと効果、サービスの多寡という風に考える。最初に稲村さんがおっしゃったけれども、脳科学から考古学、哲学まで、26人の一級の研究者に集まっていたいただいたのが本書ですが、実は経済学の専門家はあえて呼ばなかった。そこには、計れるもので良悪を評価するという価値観とは別なものが必要ではないかという思いがありました。そして単なる「情報」にはならないものこそが、実は共感なんです。そうした立場で地球各地で取り組む必要がある。在来知、あるいは先住民から学ぶというのは、まさにSDGsに欠けているこの多様な地域文化を活かすということなのです。

清水：地球研の名称に、日本語では隠れているけれど、英語では「Research Institute for Humanity and Nature」とある、まさに「Humanity and Nature」（人文知と自然）という視点ですね。

阿部：日本語名称は文科省がつけたもので変えることはできません。しかし英語の名称は自分たちでつけてもよいということで、日高敏隆・初代所長が考えたものです。日高先生は環境問題の根底にあるのは文化だ、人と自然の関係は文化に内包されている、と看破していました。われわれは、せっかく作った共通目標であるSDGsを頭から否定することは避けて、山極さんの言うように、どうにかして多様な地域に文化に、落とし込むことを考える必要があります。地球研には全国の高校から環境問題やSDGsについて話してくれ、という依頼

¹¹ 「文化的多様性に関する世界宣言」の翻訳は文部科学省HPによる。

<https://www.mext.go.jp/unesco/009/1386517.htm>

が来ますが、僕はよく高校生に「18 番目の目標, My SDGs を考えてみようか」と話します。まさに「十八番（おはこ）」なんだけれども、上から与えられたものでなく、まず自分の身の回りを見渡して「私の（自分たちの）SDGs」をつくるということです。地域の個性を活かした実態のある SDGs を個人や地域が作っていくということですね。

中原：地球研の中でも「My SDGs」があっても良いですね。地球研ではミツバチを育てている研究者がいます。ミツバチによる蜂蜜生産というのは、まさに土と植物と動物の繋がりなんですよ。一度分蜂に立ち会えたのですが、ある狭い範囲の自然資源が近隣の森に広がるのが実感できました。ミツバチが採蜜する花を上手く育てることができると、いろんなことが相関しているのが目に見えるようになるのではないのでしょうか。

山極：植物を開花させ、花粉を運び蜜を貰うという、まさに共生・循環のモデルですね。

■食を再考することの重要性

稲村：蜂蜜の話が出たところで、本の Phase V（最後のパート）の中で重要な議論となった食の問題に進めたいと思います。残念ながら今日は、本の中で「プラネタリーヘルス」（地球の健康と人の健康の相反・相関）について書いてくれた食の専門家には、都合で参加していただけなかったのですが、食は個人的な事柄であり日常そのものであり、食を考え直すというのは、まさに、一人一人が取り組むことができる大きな変革、「My SDGs」として目標化できる。また、フードロスの削減のように数値の目標も立てやすい。一般的なエネルギー消費とか資源利用とかいうと、どうしても茫漠としてしまうのだけれども、食はとても具体的に身近な事柄として捉えやすい。人類史、地球規模の問題としてレジリエンスを考える上で肝になる事柄ですね。

阿部：あの論考（第 21 章）を読んだことでとても勉強になりました。僕はもともと農学から研究世界に入ったのですが、主食の安定供給こそ農学の基本だと思っていた。それが覆されましたね。人類が主食を「発見」し、農業が主食生産に傾注した時から、食の多様性が失われ健康が損なわれてくる。近代農業が、生産性を追い求めて農薬や化学肥料を多用した結果「地球の健康」を損なってきたことは指摘してきたのですが、人類の健康も損ねているとは。

山本：実は近代社会では、食糧の問題は基本的にカロリーベース、生存に必要な総摂取カロリーを如何に保証するかという視点で考えられてきた。つまりそこには、多様性とかいう考えは入っていなかったのです。しかし総カロリーを保証するだけでは、短期的には良いけれども、長期的生存となると難しいのは明らかです。

阿部：そうすると、人が総カロリーを確保しやすくなった農業革命というのは、プラネタリーヘルス、つまり地球と人類の健康という視点から、人類史上どう位置づければいいのか再考する必要があります。

山極：農業革命は、食物の単純化という点で重大な問題を引き起こしました。穀物や根菜を貯蔵するわけですから、カビなどの被害を受けるようになる。だから、本来の油脂などを取り除いて粉にしたりして、要するに炭水化物だけになる。それによって、炭水化物、糖분을過剰に摂取するようになる。加えて狩猟採集生活ですと、現代の狩猟採集民でも 1 日に男は 15 km、女は 9 km 歩くとされます。農業革命で定住生活が始まると自ずと移動距離は短くなりますが、文明化、産業革命によってそれはますます加速され、我々に至っては、水平移動は車で垂直移動はエレベーターで、一日中モニターの前で過ごすという、生物として変な生活になってしまった。これで成人病にならないわけがない。

さらにここが大切なのですが、そうした食生活、ライフスタイルが文化として世代から世代へ引き継がれ変化していく。生物としての人の体はそう短期間には変わらないけれど、文化の方が着実に人の身体環境を変えていくわけです。それが今大きな負荷になっている。面白いことに野生動物は飽食するのです。十分に食べたらずで満足。だから肥満体がないのです。ところが飼育した途端に肥満になる。過剰にかつ単一の餌を食べるからですね。まさにそれと同じことを人間はやってきた。

■「上からの」文明史観に対抗する物語が必要

清水：そうすると、人類にとって農業革命とは進歩だったのか、もっと言えば文明形成史というのは何だったのか？ という問いになりますよね。ジェームズ・スコットの *Against the Grain* が日本語でも翻訳され話題を呼びましたが(『反穀物の人類史』みすず書房, 2019 年), 「国家誕生のディープヒストリー」というサブタイトルに示されているように、豊かな採集生活を謳歌していた人々に対して、権力志向の強い者たちが、穀物を栽培させる。穀物は計量できるし保存できるから、税として取り立てることができる。余剰の富をつくるための労働力を確保し、税を取り立てるために、定住農業を基盤にした社会が作られたのがいわゆる「四大河川文明」。そうして人々は古代国家に飼いならされていった、というのがスコットの主張です。彼は、なぜそれが促進されたかという駆動力はあきらかにしていないけれども、多くの人々が好んで積極的に農業革命を進めたのではなくて、上からの、国家形成期の権力による強制という側面があったという見方は斬新です。本の中で藤井純夫さんが紹介された、「後ろ手に縛る」イメージとも重なります。

そうした、いわば上からの農業革命に対して、今回本の中で特に取り上げた「新世界」(南米)の、特にアンデス高地での農業の起源、文明形成とは何だったのか？ 標高差によって多様な生態環境を巧みに利用して、農牧複合を形成する。野生に近い有毒なジャガイモを栽培して凍結乾燥加工して利用するなど、「半野生」のまま自然資源を利用する社会ですね。



アンデス高原の先住民（牧民）が家族で行う儀礼。アルパカやリャマの「真の所有者」と彼らが考える山の霊や、家畜を育ててくれる大地の霊にトウモロコシ粒や香などの供物を捧げる。アンデスなど新大陸の社会では、セミ・ドメステイケーション（半栽培，半家畜化）と呼ばれる柔軟で多様な自然利用が行われた。（稲村撮影）

そのように比較してみると、僕は、いわゆる「四大文明」の誕生だとか、集約的な灌漑農業の発展、強大な国家形成というような、我々が信じてきた文明形成史は、実は、その後に世界中を植民地支配する西洋が作り出した歴史観であり、それを鵜呑みにしない方が良いのではないかと考えています。

阿部：スコットの提起は大変重要でした。いわゆる四大古代文明における国家というものが如何にもあこぎな収奪のシステムであり、それを支えたのが農業革命だったという話ですよ。そして我々は、それを人類の進歩・発展の歴史として見てきた。進歩・発展を英語で言えば「Development」ですが、まさにそれは「開発」そのものです。つまりはこれまでの文明史観は「開発史観」だったと言って良い。我々は、そうした見方に対抗できる人類史を語る必要がある。

ただその点で注意が必要なのは、我々研究者の言葉はなかなか社会に伝わっていかないという悩みです。発掘し観察し実験し解析して実証的に物事を示し、そこから推論して論文を書く。もちろんその道の専門家の間では話題にはなるのだけれども、市民には読んでいただけないし、共感も広がらない。どうすれば良いのかと日々悩んでいるのですが、そんな折り、知人がいま書いている原稿の中で¹²、面白い論文を紹介しているのに出会いました。コロナ禍の話にも繋がるのですが、2020年12月号の *Scientific American* 誌に載った論文¹³です。

¹² 鈴木哲也（堤稿中）「運動としての専門知：対話型専門知と2061年の子どもたちのために」（村上陽一郎編『専門家とは何か』晶文社、に掲載予定）。

¹³ Hershberger, Scott (2020) The 1918 Flu Faded in Our Collective Memory: We Might 'Forget' the Coronavirus, Too. *Scientific American*, 323(5).

1918 年から 1920 年にかけて大流行したスペイン風邪のことは、コロナ禍が始まった頃にしばしば報道され、いま多くの人が知っているでしょう。ところが、1924 年、つまりスペイン風邪が終息して 5 年に満たない時期に、エンサイクロペディア・ブリタニカ社が、その時点までの 20 世紀の歴史について『この波乱に満ちた時代：当事者が語る現在進行中の 20 世紀』という大著を出版した際、そこには、「スペイン風邪」のパンデミックが、一言も言及されていないというのです。著者になったのは、当時第一級の人文学者、科学者、政治家、軍人など 80 人以上、ページ数は 2 巻合わせて 1300 頁におよぶ大著の中に、そのわずか 5 年前まで、5000 万人、研究によっては 1 億人の命を奪ったとされる疫病について、1 行も書かれていない。さらに調べてみると、その時代に数多く編まれた教科書や本の中でも、「スペイン風邪」はせいぜい第一次大戦の余談としてしか触れられていないらしい。

これほどの大惨事が社会の記憶から短期間で薄れるのは何故か？ いま「集合的記憶 (collective memory)」の概念を鍵にして、社会科学者の注目が集まっているらしいのですが、その際、ワシントン大学のジェイムズ・ワーチという心理学者は、「集合的記憶は、明確な始まりと中間部、そして結末のある物語」に大きく依存すると指摘しています。ワーチによれば、「最も偏在的で自然な認知手段の一つ挙げるとしたら、それは物語」であり、「人間の文化の中には微積分はもちろん算術を持たない例もある。だが、全ての文化は物語を使っている」という。第一次大戦に参戦した国々にとって、この大戦は、英雄と悪漢、勝利と敗北に満ちた明確なナラティブアーク（物語の全体的な進行）を提供しました。しかしスペイン風邪の場合、起源は分からず、どこからともなく何度も人々を襲い、よく分からないまま消えていった。当時の医学はこの病気の原因がウイルスであることは知らなかったでしょうが、学術論文はもちろん出ているし、多くの写真が撮られ報道もされた。しかしそれらは、この経過を集合的な記憶として繋ぎ止めるスキーマにはならなかった。だから「スペイン風邪」のパンデミックは終息するとまもなく、人々の話題から消えていった、とその論文は指摘しています。先ほど山極さんが、先住民社会のリーダーはたとえ話が上手だと言われましたが、まさに「物語」を語ることが我々には大切なのではないか、と思っているのです。

山本：その話はとてもよく分かります。「Development」にはかつて物語があったんですよ。

「昨日より今日、暮らしは良くなった。今日より明日、暮らしは良くなる」と要約できると思いますが、「明るい」物語で語られたのが「Development」（進歩、開発）です。でも、我々が「Transformability」（転換する力）が鍵であると言うとき、そこに物語が欠けている。進歩や開発とは異なる「未来」を切り開こうとするときには、異なる「物語」が必須ですね。先ほど関野さんにも紹介していただいたのですが、僕もアートが大事だと思っているのです。アートには、まさに物語を作っていくときの思考の方法や強力なツールがある。僕はいまスーダンのあるアーティストを応援していて、彼は廃材を使って色々なものを作るのですが、そこに彼が何を表現しようとしたのかは別として、そこに物語がある。たとえば、人が何かを頭の上に抱えて重たそうにしている、という像を送って貰ったことがあるのだけ

れども、その「何か」は最初は大きな石だった。ところが、石を国外に持ち出すことをスーダン政府が禁止しているということで、政府とずいぶん掛け合ったのだそうですが結局駄目で、そこで、何も持っていないけれど支えているようにした。そのプロセス自体がすでにスーダンという政情の中の物語だけれども、出来上がった作品は、抱えているものが何も無いからこそ、具体的なものよりもむしろ我々の想像をかき立てるわけです。それは地球なんだろうか、あるいは天空なんだろうか、とか。残念ながらスーダンではクーデターが起きてインターネットも繋がらないので、今、連絡が取れないのですが。

稲村：たしかに今、地球を問題にするとき「なんとかしなきゃ」という話には「仕方なく」という発想がありますよね。これをいわば「プッシュ要因」だとすれば、「プル要因」つまり魅力的な「物語」、心からそう思えるような何かを作る必要がある。ただ、我々の中から、進歩という「物語」、すなわち科学技術による明るい未来という幻想が抜けていない。それが失敗したのが明らかになってもです。だから、これからは「発展史観」とは異なる、いわば「レジリエンス史観」に基づいた「こんな魅力的な未来をつくろうよ」という「物語」を作っていく必要があります。

阿部：たしかに別の「物語」が必要です。ユネスコの「Narrative of Change Program」では、社会を変えてゆくためには物語が必要だと言っている。未来は想像されなければならない、想像されたものは物語として記録されなければ社会は変わらない。SDGsになんとか魅力が無いのは、あそこには目標があるけれども、物語は何も無い。目標をやり遂げたあと何が生まれるのか。でもそれは、アーティストにとっても難しいことらしいのです。先日劇作家の平田オリザさんとお話をしたのですが、演劇においてディストピア（暗黒の世界、反理想郷）を作品にするのはしやすいのだけれど、ユートピア（理想郷）はできないと言うのですね。

山本：さっき防潮堤の話をしました、「津波が来ました、被害を受けました、だから 10 メートルの防潮堤を作りました、また今度はそれを越える津波が来ました、だから 20 メートル……」という復興政策の中には、ユートピアの物語はないですね。でもディストピアの方はあって、高い防潮堤には違和感があるけれども、そうした構築物を作る促進要因にはなっている。

■死を意味あるものとして位置づけること

阿部：関野さんの「死体とウンコの復権」が良いのは、「明るい未来」思考にはない、死を意味づけるものがあることですね。ひたすら健康で、生き延びて、美しくというのはない、死や汚いものにこそ意味があるというメッセージ。

山極：そうした死への思いというのは、かつては宗教が担ったのです。それが科学技術の発展によって霊的なものが地位を低下させ、宗教が衰える。その宗教もビジネス化してしまい、発展志向に組み込まれてしまう。ですが先日、世界宗教者平和会議（WCRP）の創設 50 周年という集まりが京都であって僕も呼ばれたのですが、「WCRP 日本委員会アジェンダ 2030」という行動目標が示されました。SDGs への積極的参画などもうたわれているのだけれど、SDGs で触れられていない、核兵器をはじめとした軍事、労働搾取、信教の自由といった問題も取り上げられて、とても立派なものです。科学者の我々ももちろんだけれど、宗教者が呼びかけることは、アートと同様の力がある。

中原：先ほどお話ししたミツバチで言えば、循環ですね。「死」と「生」の両方を科学の中に組み込むことができる。

稲村：確かに科学の発想のしかた、記述のあり方を僕らが考える必要があって、科学それ自体が広く社会的なニーズや関心とは無関係に自己増殖し専門分化して、その中でのみ競い合って物事を考えている。個々の分野でやれることをそれぞれやっていて、科学全体の問題を真面目に討議する公の場や機会が欠けている。

関野：「死体とウンコの復権」でいうと、そのキーパーソンは 3 人いるのですが、一人が絵本作家の館野鴻（たての ひろし）さんという方で、画家なのだけれどほぼ科学者です。『しでむし』という絵本は、アカネズミの死骸を糧に子育てをするシデムシの一生が、実に精密な絵とともに語られます。冒頭で可愛らしいアカネズミが死ぬ、生きているものが死ぬのです。その死体に、ハエが来てシデムシが来て、ダンゴムシが来てハネカクシが来て、いろんな生き物の食べ物になる。そしてそのシデムシが成長する様を実に精密に書く。科学の目で描かれた物語です。

山極：腸内細菌を絵にするというのもそうですね。本来小さいし透明なものだから目に見えないのだけれど、それを色づけして、あたかも個性があるもののように描くことによって、そこで何が起きているのか、そのメカニズムを物語化している。実際にウイルスが細胞に入って増殖するという過程は、絵にすることで、現実とは違うものになるのだけれど、我々はそうすることでしか理解できないですからね。

清水：日本には目に見えないものを絵にする妖怪画のようなものがありますが、そうした伝統の背景が輪廻転生ですね。僕は「Transformability」を本の中でとりわけ強調しましたが、仏教の世界観と通じるでしょう。いまあるこの形の生が終わっても、そこから次の新しい生の形が生まれるという循環と変化。それは「Development」（進歩・開発）という一方向への「上昇」志向では無く、恒常安定型のシステムを良しとする哲学思想だと思うのです。

だから「トランスフォーマビリティ」なんて学者先生がカタカナなんか使わずに、みんながよく分かる「輪廻転生」と表現してもいい。「魂」と言うべきか、死んでも生の本質的なものは残るだろう、それがまた形ある生を誕生させるというように、昨日より今日、今日より明日という単線的な「豊かさへの希望の物語」とは別の語りがしたいですね。

■「共感」から「共歓」へ——評価指標の転換

稲村：今回の本を編んでつくづく思うのは、これまで様々な危機に対して人類がレジリエンスを働かせて危機を乗り越えたように見えるのだけれども、またそれが新たな危機を呼ぶ、いわば、レジリエンスとリスクの再生産の歴史だったようにも思うのですね。阿部さんが本の Key Concept 3 で説明してくれた生態系の適応ループのように、自然に一旦安定化したものが、バックループに入って解体され再構成されて、また次の循環に入っていく。その際、人類のレジリエンスのループというのは、馬場さんのおっしゃった「拡大再生産」の方向で進んでいった。しかしもうそこには限界がある。ループの基盤になる地球がもたない。

清水：ですから、そのループをらせん階段を上がるように理解すると、結局、開発と市場主義の方に絡め取られてしまう。結局のところ物質的な意味での豊かさと満足を目指した上昇のループですね。しかし満足は欲望と結びついており、現代の資本主義は飽くなき欲望を満足させようとする人間の心性と行動を動力としています。しかし満足へのループと幸せへのループは基本的に大きく違っていると思います。その違いを自覚して、人間の生き方と社会のあり方を根底から変えていこうとする時に、身近にあって使える言葉は仏教の言葉になってしまうのだけれども、死を意識した循環モデルをイメージしたトランスフォーマビリティ（転換する力）が重要だと思う。

山極：先ほど「経済学」の問題点について言いましたが、「物質的な豊かさ」という話をもっと突き詰めて言うと、近代化以降のこれまでの歴史では、すべての物事を評価する際に、生産性、効率性を価値づけてきたということになるでしょう。たとえば労働ということを考えても、共感の誕生という部分で書いたように、人々が、生存のための目標を共有して共に活動することに喜びを感じるというのが、本来の人の姿だった。その労働が、まさに効率性と生産性によって測られている。農業にしても、自然のサイクルの中で人々が集まって、植物を育てていくという農作業自体に価値があったはずなのに、今は、そこでできた農業生産物だけに価値が置かれることで、労働の価値評価が変わってしまった。いまアフリカの農業でも起こっているのは、生産性を重視することで、化学肥料を投入し機械化を進め、確かに食糧生産物は増えたように見えるのだけれども、農業労働の現場から人の姿がどんどん消えているという実態です。これは誰もが知るように、アメリカがやってきた農業の近代化の焼き直しです。そこには、人々が集まって一緒に働くという、もともとアフリカの農村が持っていた楽しみは無い。元来の労働の価値に力点を置いてみれば、たとえ生産性が低いまま

でも、人々がともに働いてその成果を分け合うというところが評価できる。こちらの方向に評価基準を変えることが必要ですね。

清水：そう考えると、我々の本は「共感」から始まったのだけれども、その「感」の部分を「歓」と置き換えて考えると転換の目標になるかもしれません。「共感」だけだと、それが仲間の外側にいる他者の排除に繋がることもあるし、仲間内の「幸せ」を求めて、生産性・効率性を求める妄想のあげく、阿部さんがやはり Key Concept の中で示してくれたグレートアクセレーションをもたらした今日のグローバル資本主義にまで爆走してしまう。そこで「共歓」を価値の基準あるいは目標とすることで、「Development」のループを脱することができるかもしれない。僕が「共歓」という言葉で言いたいことは、仲間内だけでなくグループの外の者たちとも、さらには人間以外に動植物や精霊などの存在も意識しながらこの世界に生を受け今を生きていることを共に歓びあうような生活や心性のあり方です。労働の疎外というのは産業革命のまっただ中にマルクスが提起したことだけれども、グローバル資本主義の果てにある今、「共に歓ぶ」ことを価値づける哲学を出せるのではないか。

阿部：イヴァン・イリイチが1980年代に提起したコンヴィヴィアリティ（自立共生）という概念に通じますね。人間の本来性を損なうことなく、他者や自然との関係性のなかでその自由を享受し、創造性を最大限発揮させていくという社会。そうすると、我々が「トランスフォーマビリティ」というとき、何をトランスフォーム（転換）するのか、ということが見えてくる。「転換」とは、何よりも、価値評価のあり方、評価基準そのものを転換することなのだ、という風に感じます。近代的な意味での、「豊かに美しく」生きることには価値があるのではなく、「死や汚さ」にも価値がある。コロナ禍にしても、ひたすら生き残るということが大事なのか。人間はどうしたって死ぬのですから、輪廻転生ではないけれど、死にも意味があると捉えながら物事を考えていくことも必要なのではないか。

清水：京大人文研の藤原辰史さんが『分解の哲学：腐敗と発酵をめぐる思考』（青土社、2019年）という本を書かれて、いま、若い研究者の間でとても評判が良い。成長一本槍ではなく、死んで腐敗して新しいものが生まれることに資する、新しいものになっていくというのは、時代の感性として、広がりうるのではないのでしょうか。

■コロナ禍を「良性の危機」にできるか

阿部：実際地方に講演などに行くと、若い人々の変化を実感します。就職に地方を志向する人が増えているし、地方の高校が元気です。「地域みらい留学」という取り組みを民間の団体が進めているのですが、東京や大阪に住んでいる子どもたちが、都会の高校に行くのではなく、わざわざ地方の高校を選んで3年を過ごす。高校によっては1学年2クラスしかない生徒の半分が、地域みらい留学で都会から学びに来ているほどです。「何も無いところに



宮崎県の“何もない”，しかし美しい棚田が広がる山の中に，公立で初めての中高一貫校として設立された五ヶ瀬中等教育学校。遠く離れた端にあるから，外とのつながりを重視している。地球研もそのつながりの一つだ。(写真提供／宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校（下段），アフロ（上段）)

なんでわざわざ」と僕などは思ってしまうのだけれども，彼らは「こんなに良いところはない」と言う。もちろん寮やホストファミリーによるケアがあって，親元を離れても安心なようになっているのですが，彼らになぜこの形を選んだか聞いてみると，かなりの割合で東日本大震災の経験が要因にあるのですね。原発事故を含め，今の都市的生活の問題への気づきがあるようです。

もちろん多くの人々が亡くなった自然災害だったのだけれど，それが気づきを与え価値観を変えていったとすると，あの震災は，「良性の危機」としての側面もあったのではないかと強く思うわけです。まさに転換の契機であり，転換する力を若い人々が持っていると思えることができますね。コロナ禍も同じ「良性の危機」としていけるのではないかと。

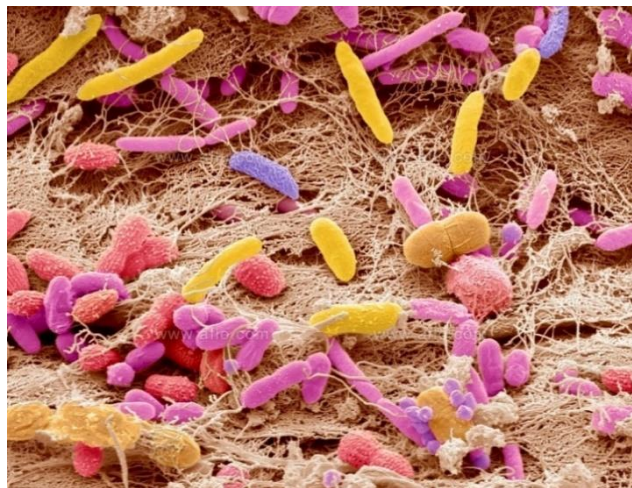
山極：すでにコロナ禍以前から，日本社会では，人生の送り方，仕事や住まいの選び方に関する意識は変わりつつあった。非正規雇用が 40%を超えていますから，今の若い世代の人たちは，一生一つの会社で奉職し年功序列で自分の将来を設計するという気持ちは無くなっている。実際，新入社員の 3 割が転職するのですから。そうした状況の中に新型コロナがやってきた。都会は安全な場所でも生きがいや得られる場所でもないことが明らかになった。地方に行けば少ない収入で助け合いながら暮らしていける。また，在宅勤務も標準的になってきて，都会の会社にいるのだけれど，働いているのは地方で，その地域の人たちと交

流もできる。価値観と同時に、それを具体化できる条件をコロナ禍が作ったといえますね。

山本：「腐敗と発酵」という話が出ましたが、微生物の作用というのは、どれも常に両義的多義的なのですね。腐敗も発酵も事柄としては全く同じ分解作用で、ただ、人が自分に役に立つものを「発酵」と呼び、不快に思うもの、隠しておきたいものを「腐敗」と名付けて、善悪に分けて表現しているだけなのです。ウイルスと人の関係も同じです。ウイルスは代謝系を持たないので自己増殖できない。だから他生物の細胞に寄生することによって増殖するし、自分自身ではエネルギーを産生せず、宿主細胞の作るそれを利用するのですが、その際、宿主の側に様々な作用を及ぼす。宿主にダメージを与える場合、それは病原体けれども、ウイルスが外来遺伝子の運び屋として作用して、宿主の生存に有利に働く場合もある。進化を促進する役割も持っているわけです。

このように微生物と宿主の相互作用というのは多様で重要なものもたくさんあるのに、ネガティブな局面だけを取り出して、良い悪いと言ってきた。だけれども、「腐敗」も大切だよ、と言えるような知見をようやく今の我々は持つことができるようになりつつある。先ほどから議論されていた、単線的な理解でない視点の多様性という話ですが、そこに、コロナ禍が起こったわけです。ここで「ウイルスとの闘い」と言うのか、もっと大きな視点でウイルスと生物の相互作用として捉えることができるのか。ウイルスとの「戦争」とか「闘い」と言ってしまうと、それは排除するだけのものになるけれども、そもそもウイルスというものを無くすことはできないし、そんなことをすればそれは生物界に大きなダメージを与えてしまう。そういう認識を持てる時代になってきた。

ただ、先ほどの物語で言えば、そうした大きな物語と同時に、新型コロナ感染症で亡くなったおばあちゃんとその家族の悲しみという小さな物語もある。この大きな物語と小さな物語をどう摺り合わせることができるのか、回収できるのか、それが重要になる。たとえば循環・共生の物語としてどう語っていけるのか、重い課題ですが、とても大切なことだと思います。



ヒトの糞便サンプルから発見された細菌の電子顕微鏡写真。私たちの糞便の水分を除いた乾燥重量の半分以上は、腸から排出された細菌で構成されている。腸内細菌叢の中には、時に食中毒を引き起こす可能性のある病原菌も存在するが、多くの細菌は消化に有益である。人の体は膨大な数の微生物との共生の上に成り立っている。コロナ禍はそうした人と他の生物との関係を知る機会でもありうる。(写真／アフロ)

中原：マーシャル諸島人というのは、人口4万人、海外に3万人以上いると言われているのですが、アメリカで、コロナ禍で最も大きな被害を受けた民族集団というのは、実はマーシャル人だったのですね。と言うのも、本でも書いたように、マーシャル社会の基本的特徴は相互扶助です。だからコロナに罹った人を手厚くケアするのです。親族が患者のところへ行って、慰めたり看病したりする。だから爆発的に感染が広がって、中には両親とも亡くなって子どもだけが残されたという例もある。そうすると、共感をベースにした社会というのは、どう考えれば良いのだろうと悩むわけです。

山極：先ほどの議論のように、我々は死者の上に社会を作ってきた。この物語は重要です。しかし今、コロナ禍で起こっているのは、死に目に会えないという事態です。死者は増えているのに、大切な死そのものから遠ざけられてしまっている。死者が忘れられていきかねない。この点は、今後の人間社会を考える上で、重大な危機だと思いますね。

山本：SDGsでも、次の世代への責任ということが言われますが、同時に、我々は死んだ世代への責任も負っていると思うのですね。だからこそ、過去の世代を批判もするし、どこで間違えたのかを考えもするし、過去の世代が残してくれたものを未来に繋げていく。そうした連続性を、コロナ禍の元でどう保障するかということですね。

山極：動物と人との大きな違いの一つは、人間の文化は蓄積できるということです。過去の事柄が延々と蓄積されて文化をつくる。しかし動物の場合、ヒトもある時代まではそうだったでしょうが、蓄積していかない。だから長い間社会は変わらない。僕は昔戦争責任について考えたことがあって、酷い言い方をすれば「なぜ親の世代がした戦争の責任を我々が負わなきゃいけないのか」という考えもある。でも、我々が死んだ者の蓄積の上に生きていくことができるのだから、やはり我々子や孫の世代も戦争責任を負い続けなければいけない、と考えました。そうした過去と未来への責任意識というものが、死に立ち会えないことが日常化することによって、どうなるのか。

■今に生きる大人たちの責任

阿部：地球研は京都府・京都市などとともに「KYOTO 地球環境の殿堂」という事業を行っています。2010年に第1回の殿堂入り者となった真鍋淑郎先生が2021年のノーベル物理学賞を受賞されたのはうれしかったですね。殿堂事業には京都の高校生たちも参加していますが、彼らの考えに思わず背筋が伸びたことがあります。10代の環境運動家グreta・トゥーンベリさんの活動が話題になった時に、高校生がこう言ったのです。「グretaさんは偉いと思う。でも自分たちは彼女と同じように大人相手に抗議行動をすることはないと思う。というのも、自分たちはいま大人から学んでいる最中だから」と。あなたがたの背中を見えます、日常の行動を見えますよ、というメッセージです。

山極：価値基準という話をしましたが、日常の行動においても、我々がいま振る舞いを変えなければいけないということですよね。我々この数十年の世代は、短期的に利益が還元できるような将来投資しかしてこなかった。それによって自然から収奪・搾取するようになってしまった。でも昔のコミュニティでは、自分が死んだ何十年も先の後のことを考えて、木を植えたりしてきた。そうした長期的視点に立った行動、社会造りのビジョンを示すことができるかどうか、ということですね。

馬場：くだけた表現で言えば、思いやりですね。空間を越えて時間軸を越えて、過去に未来に思いを馳せて考え行動する。僕の章の最後は、思いやりの対象を未来の子孫にまで広げて、「欲望充足装置」である文明の暴走を止められるかどうかが重要だとしたのですが、ここで幸いなのは、今山極さんが言われたように、この数十年というのは取り返しのつかないほどには長くない、ということです。グレートアクセラレーションはこの50年で起こったことで、何も何万年、何千年と時間を引き戻す必要はない。最初の東京オリンピックが開かれた1964年には、東京でも市街から歩いて行けるところに、里山が広がっていた。ではその時代、ひどく貧しかったとか不幸だったかと言えば、もちろん社会の局面で言えばそうした場面はあったし、世界的に見れば冷戦や熱戦はあったけれども、全体としての生活の質はそこそこ満たされていた。新幹線もインターネットもハイテク家電もなかったけれども、不便極まりないということとはなかった。

ヨルゲン・ランダースの『2052 今後40年のグローバル予測』では、そうした文明の「成長」を制限することに国民として合意できるのはおそらくドイツしかないだろうと言っています。僕はそこに日本を加えたい。要するに規律、規範を遵守できる国民ということなのでしょうし、そこには時に「自粛警察」が登場するような、集団的な規制の押しつけという危険性もあるのだけれど、こうと決めたことは世界に率先して実行するというのはドイツと日本かもしれない。そしていま日本社会が価値転換をできたら、100年後、200年後の世界からどれほどに感謝されるか。

阿部：確かにほんの少し前、我々が子どもの頃の自然環境を思い起こせば良い。たとえば映画『となりのトトロ』の舞台は1950～60年代の狭山丘陵、東京と埼玉の境あたりだと思いますが、その頃は、東京の近郊にもあれだけ自然豊かな里山の風景があったわけです。国土地理院の「地理院地図」というサイトで、今の日本地図の上に、1940年代くらいからの航空写真をシームレスで重ねて見ることができます。国土の変遷が一目で分かって、1960年代のものはカラー写真でないのが非常に残念ですが、いまや大都会の真ん中となっているところも含め、都市のすぐ近郊に「トトロの風景」が広がっていることが分かります。それが70年代の航空写真では一気に変わっていて、以後大変な勢いで、都市が山野を侵食していく様子が、痛いほどに分かる。

もちろん、ジェンダー格差とかマイノリティへの差別、植民地主義といった社会状況について言えば、60年代は今よりもずっと酷かった。アメリカで公民権運動が起きたのは60年代で、その頃は、まさか黒人がアメリカの大統領になるとは、誰も思わなかったでしょう。けれど、むしろ経済的な格差とか少数者による極端な収奪ということ言えば、今の方が酷いのではないのでしょうか。だから、社会正義の実現といった到達点は踏まえながら、環境負荷という点では、ほんの少し前にまで戻すというソフト・シュリンクができればいい。そし



国土地理院「地理院地図」システムを用いて、本討論の関係者の一人が少年期を過ごした神奈川県横浜市日野付近の変遷を見る。1960年代中頃（上）には、谷津¹⁴を利用して水田とした独特の里山の風景が広がるが、70年代中頃（中）には宅地や道路の造成が激しく進み里山の面影は全くない。下段は現在の様子。最も広がった谷津の水田は、自動車専用道路（横浜横須賀道路）のインターチェンジとなっている。時代をほんの少し戻すだけで、豊かな地球を取り戻すことはできないだろうか。

¹⁴ 丘陵地が浸食されて形成された緩やかな谷状の地形。主に関東・東北地方に多い特徴的な地形で、地域によって谷（や）、谷戸、谷津、谷地、谷那などとも呼ばれる。西日本における迫（佐古）、岐阜県での洞（ほら）も同様。そこが水田として利用されると、上の1960年代の写真にあるように、うねうねと細長く続く、独特の美しさを持った景観となる。

て僕らの世代は、理屈や文献ではなくて、その時代を生身で経験しているのです。

そうした、少し前の時代を知っている大人たちが、もっと具体的に語り、生き方を示していくべきですね。せいぜい 50 年で酷くしてしまったならば、まだまだなんとか戻せるという希望で過去を見る、死者を見る。700 万年を振り返りながら、この 50 年をしっかりと自省するというのが僕らの世代の責任でしょう。

山極：循環との関わりで言えば、まさに 1970 年代あたりから本格化した、スクラップアンドビルドの発想が悪いのですね。それまでは、京都の町家や寺社建築の更新のように、何十年か毎に、同じ素材を使って更新をするような町を作っていた。しかし、今は、都市も商品もそうですが、さほど保たないように作って、古くなると簡便に、完全に、石油と鉱物から作った素材で更新してしまう。

稲村：「共感」の空間と時間の限界を超える試み。清水さんが言った「共歓」（集団の境界を超え、さらに人類以外との境界も超えるような「共感」）への転換と、時間的には過去と未来へのまなざしというのは、我々が『レジリエンス人類史』に込めた究極のメッセージだろうと思います。我々は「過去には戻れない」という発想にとらわれすぎているのかもしれない。我々が発揮すべき転換力とは、未来に向けて、過去の知と、世界中で今生きている人々の知を集めて、新しく創造する力でしょう。時間も空間も、あっちこっちに行きつ戻りつして、知恵を力にする。その知恵は我々が本書で紹介した以外にもたくさんあります。そして、ただ現状が大変だと警告するだけではいけない。価値基準をこれまでとは変えた、若い人たちが希望を持てるような、共に飲べる目標、魅力的な物語を示すことが、これからの課題ですね。

山極：馬場さんから日本こそが転換の先駆けにという話が出ましたが、以前、ドナルド・キーンさんに京都大学で講演をしていただいたときに、「世界中で、1000 年前の庭が残っているのは京都だけ、それが京都の特殊性だ」とおっしゃったのです。これだけの知恵の蓄積が京都には息づいている、そして、総合地球環境学研究所はまさに京都の、里山が残る上賀茂の地にあります。人類史におけるレジリエンスをテーマにこの本を作り始めたわけですが、有史以前を振り返ると、それぞれの時代に人類が生物として内在させてきたものから獲得してきた能力があったことが分かる。しかしいま我々は、科学とか技術とか、人間の外側にあるものを頼って生き延びるようになって、内なる力を忘れてしまいつつある。本書とこの討論を期に、1000 年の過去からの文化的蓄積をもった京都から、現代の危機を乗り越える人類らしい知を示していけたら良いと思います。



前列右から、山極壽一、山本太郎、馬場悠男／後列右から、関野吉晴、稲村哲也、阿部健一、清水展、一人おいて中原聖乃
(2021年11月26日)

表紙右上：ウルク後期の円筒印章 (bpk / Vorderasiatisches Museum, SMB / Olaf M. Teßmer / distributed by AMF)

表紙左中：前期旧石器時代の手斧の一部 (写真/アフロ)

共感から共歓への昇華を目指して：レジリエンス人類史 総合討論

発行日 2022（令和4）年3月31日発行

発行者 大学共同利用機関法人 総合地球環境学研究所
〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山 457-4
電話 075-702-2100
<http://www.chikyu.ac.jp/>

企画 阿部健一

編集・制作協力 京都大学学術出版会

ISBN 978-4-910834-00-9

本コンテンツ上の発言内容、デザイン画像、写真などの著作権は、それぞれの発言者、著作権者に属します。著作権法上での例外を除いた利用の際には、それぞれに許諾が必要になります。

The copyrights to the content, design images, photographs on the contents belong to the respective speakers and copyright holders. Except for exceptions under the copyright law, permission must be obtained from each of the copyright holders.